

ブチギレ戦士アムロ

金光初

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「2度もぶった！親父にもぶたれたことないのに！！」

ホワイトベースの自分の部屋でアムロはブライトに二度も殴られた。

「それが甘ったれなんだ！殴られもせずに一人前になった奴がどこにいるものか」

「そんなにガンダムを動かしたいんだったら、あなた自身がやればいいんですよ」

「何？ できればやっている。貴様に言われるまでもなくな！」

「じゃあやれよ。あんたが乗ってみろ。ガンダムに乗ってみろ」

「分かったよ！ のってやるよ！ のればいいんだろう！」

やけくそでブライトが叫ぶ。

こうしてブライトはガンダムに乗ることになった。

目次

第1話	1
第2話	7
第3話	12
第4話	16
第5話	19
第6話	22
第7話	26
第8話	29
第9話	34
第10話	41
第11話	49
第12話	60
第13話	67
第14話	77
第15話	83
第16話	97
第17話	112

第1話

「2度もぶった！親父にもぶたれたことないのに！！」

ホワイトベースの自分の部屋でアムロはブライトに二度も殴られた。

「それが甘ったれなんだ！殴られもせずに一人前になった奴がどこにいるものか」

大きなポーズをとりながらブライトが叫ぶ。

「もうやらないからな。誰が二度とガンダムになんか乗ってやるもんか！」

「アムロ。今のままだったら貴様は虫けらだ」

「そんなにガンダムを動かしたいんだったら、あなた自身がやればいいんですよ」

「何？ できればやっている。貴様に言われるまでもなくな！」

「じゃあやれよ。あんたが乗ってみろ。ガンダムに乗ってみろ」

「何を言うか！ ホワイトベースの指揮は誰がやるんだ」

「リード中尉がいるじゃないですか」

ルナツーを出発したホワイトベースに護衛としてサラミスがつけられた。

そのサラミスの艦長がリード中尉だ。

大気圏突入時にカプセルで先導したが被弾して、現在はホワイトベースに乗っている。

「何を言うか！」

痛いところを突かれてブライトは焦っていた。

「あんたみたいな代理で艦長やってるやつと違って、リード中尉は正式なサラミスの艦長だ。」

階級だつてリード中尉の方が上でしょう。ホワイトベースの指揮はリード中尉にとつてもらいましょう。

ブライトさんはガンダムに乗ってください」

「だが、シミュレーションも訓練もやってないし・・・」

「何を言ってるんですかプライドさん。僕だつてシミュレーションな

んてやってませんよ。

訓練だって受けてませんよ。サイド7でガンダムに乗る前はマニュアルを

パラパラと見たぐらいですよ」

「いやー、でもね、やっぱりちゃんと実績のある人が乗ったほうがいいんじゃないかなとも思うんだよね。アムロほどの才能があれば、

シャアだって越えられると俺は思ってたんだ」

「今度はゴキゲンとりですか？ 今更そんなもんが通用すると思いませんか。

早くガンダムに乗ってくださいよ。できるならそうするって言つてたじゃないですか。

もしかしてビビってるんですか？ 正規の軍人であるあなたがビビってるんですか？」

「分かったよ！ のってやるよ！ のればいいんだろう！」

やけくそでブライトが叫ぶ。

こうしてブライトはガンダムに乗ることになった。

「ブライトノア。ガンダムいきまーす」

着地でこけるガンダム。

「ぐはああ！ 発進時の G がこんなにすごいとは」

その衝撃で盾を落としてしまう。

「何やってんですか、プライドさん」

通信モニターの向こうでアムロが見下すような顔で発言する。

「どうしたっていうんだアムロ。調子が悪いのか」

ガンダムの動きのぎこちなさを見てリュウウが心配する。

「現在ガンダムにはブライトさんが乗ってます。ガンキャノンとガンタンクは援護をお願いします」

セイラさんの通信が入る。

「けけけけけっ。プライドさんがガンダムに乗ってるのかい。お手並み拝見としますか」

カイシデンが嬉しそうにケタケタと笑う。

「出てきたな白いモビルスーツ。ビービ隊はモビルスーツを攻撃しろ。私の部隊は木馬をやる」

ガルマザビ大佐が部下のドップ隊に指示を出す。

「狙っているのに当たらない。こんなに射撃が難しいとは」

ブライトは迫り来るドップをビームライフルで討ち落とそうとするが全く当たらない。

しかしトップからの攻撃はめちやくちや当たりまくる。

「ブライトさん、ちゃんと回避行動を取ってください。まったく、それじゃあいいのですよ」

「うるさいぞアムロ。こつちだって大変なんだ」

「戦闘中に横から口を出されるとイライラするでしょう。今まであなたがやってきたことだ。

自分がやられたらよくわかるでしょ」

戦闘中のホワイトベースから離れたところにいるガウ攻撃空母。

「しかし見事じゃないかガルマ大佐の攻撃は。親の七光りで大佐になっただけの人物ではないな」

ガルマに手を出すなど言われてガウで待機中のシヤア少佐。

「少佐、我々は見ているだけでよろしいのでしょうか」

「どうでしょうか？　へたに手を出してガルマの機嫌を損ねたくない。

だが・・・今回は白いモビルスーツの動きがいつもと違うな。

ガルマ大佐との通信回線を開いてくれ」

ガルマは絶好調だった。ビービ隊がモビルスーツ部隊に有効に戦闘をしていたし、

自身の部隊は木馬に着実にダメージを与えていた。

「このまま行けば木馬もモビルスーツも撃墜するのは時間の問題だ」

「ガルマちよつといいか」

「どうしたシヤア」

「私もザクで出ようと思う」

「いやいや私だけで大丈夫だ。落としてみせる」

「もちろん今のままでも落とすことはできるだろう。」

だが今回は白いモビルスーツの動きがあまりにも悪すぎる。

となれば撃破するだけではなく捕獲することも可能じゃないのか」
「確かにそうだな。あの戦艦もモビルスーツもジオンに比べたらはるかに高性能なものだ。」

もし捕獲することができたらどれほど戦争を有利にできるかわからない」

「そういうことだ。これはジオン十字勲章どころの話ではないぞ」

「よしわかったシヤア。モビルスーツの相手を頼みたい」

「ガウからモビルスーツ出撃！3倍のスピードで迫ってきます！シヤアです」

ホワイトベースのブリッジにオペレーターの声が響き渡る。

「シヤアが出てきたのか。まずいぞアムロ。どうする」

リード中尉が不安そうに聞いてくる。

「シヤアの相手は無理でしょう、僕が出るしかありませんね。」

ブライトさんには十分反省してもらえたでしょう。

ホワイトベースにガンダムを帰還させるように言ってください」

満足げな顔でアムロはモビルスーツデッキに走っていく。

これでブライトが反省して偉そうな態度を改めてくれたら、これから先の戦闘が楽になる。

そう思っつて、ブライトを出撃させたのだが、うまくいったようだが、ここから先はアムロの思い通りにはいかなかった。

「ブライトさん戻ってください。ホワイトベースに戻ってください。アムロと交代してください」

セイラがガンダムに呼びかける。

「ブライトさん、早くホワイトベースに戻れ。アムロじゃないと無理

だ」

カイがイライラしながら叫ぶ。

ブライトもホワイトベースに戻りたいのだが、ドップの攻撃が激しくてとてもじゃないけど戻れない。

そうしてうちにシヤアが近づいてくる。

「うおおおおお！ 当たれええ！」

ガンダムのビームライフルを連射するが、シヤアのザクはそれを全てかわし突進してくる。

「やはり動きが全然違う。いつものパイロットではないのか。これなら捕獲するのも簡単だな」

ヒートホークでガンダムのビームライフルを切断する。

そしてガンダムがビームサーベルを抜く前に、両肩のサーベルの柄を破壊する。

「畜生」

ブライトはやけくそになり頭部バルカンを乱射するが、かがみこんでいるザクには当たらない。そして弾切れ！

コックピットでブライトは悔し涙を流していた。

アム口ほどに上手く戦えるとは元々思っただけいなかった。

しかしカイやリユウだつてそれなりに戦えてはいたんだから、

自分もそれなりに戦えるはずだと思っていた。しかし何もできなかった。

それどころか足手まといにさえなっていた。悔しい。悔しすぎる。

「うおおおおお！」

「やらせんとおおおお！」

ガンキヤノンとガンタンクがシヤアザクに集中砲火を浴びせる。

しかし赤い彗星には全く通用しなかった。

ドップ編隊の攻撃によりホワイトベースのエンジンはダメージを受け、高度が低下している。

「これ以上エンジンに被弾したら墜落しますよ」

「モビルスーツはどうなってる？ ホワイトベースの援護にはこれないのか？」

「無理です。シヤアと対戦中です」

「ガンキヤノン、ガンタンクともに弾切れです」

「シヤアのザクがホワイトベースに向かってきます」

ホワイトベースのブリッジはパニック状態。

「こうなったらしょうがない。降伏しよう」

リード中尉の降伏提案にクルーたちは無言でうなだれた。

みんな解っているのだ。もう負けだ。

後は玉砕か降伏しかないのだ。

「軍人だけなら玉砕でもいい。しかし避難民もいるし、大半の乗組員は民間人だろう。」

降伏が一番だとおもう」

リード中尉の言葉に全員がうなずいた瞬間、モビルスーツデッキの
アムロが割り込む。

「まっってください。最後にやらせてください。うまくいけば追い払えるかも」

アムロはコアファイターで発進した。

第2話

「ガルマ大佐。木馬から戦闘機が発進しました」

ホワイトベースから発進されたコアファイターを見て、ドップのジオン兵がガルマに報告する。

「戦闘機1機ぐらいすぐに討ちおと・・・さて、攻撃してこない？ただの逃亡兵だろう。放っておけ。それより木馬に攻撃を集中しろ」

コアファイターがドップに攻撃してこず、

木馬から離れるのを見たガルマは、逃亡したのだと判断した。

「ガルマ。モビルスーツはすべて無力化した。弾切れになったか武器を破壊しているから、これ以上攻撃はしてこない。木馬をやった後に回収すれば良い」

「よくやったシヤア。木馬もあとは一息だ」

一方、ホワイトベースを離脱したアムロのコアファイターは、

ガンダム、ガンキャノン、ガンタンクと合流した。

アムロ、カイ、ハヤト、リュウ、ブライトの五人。

「皆さん時間がないんですぐに僕の指示に従ってください」

「おいおいアムロ君よう。この状況じゃ勝ち目なんてないでしょ」

ガンキャノンのカイが茶化すように言う。

「リード中尉の降伏するっていう発言は通信で聞いてたぞ。ここからじゃあどう考えたって無理だろ」

ガンタンクのリュウ・ホセイも諦めていた。

「アムロすまなかった。これは全て俺のせいだ」

ブライトが苦しそうに謝罪した。

それを遮ってアムロが話す。

「イチかバチ力ですか。全く勝ち目がないというわけではないです。今までだって綱渡りのような戦いで生き残ってこれたじゃないですか。最後までやってみましょうよ」

「今までもアムロに助けられたから今度も俺はやってみる。教えてくれ何をすればいい」

ガンタンクのハヤト・コバヤシが言う。

アムロは手短にみんなに作戦を説明し、四人はすぐに行動に移った。

「右舷エンジンに被弾。これ以上は飛行できません。ホワイトベース着陸します！」

オペレーターが叫ぶ。

「むううう！ ここまでか。アムロの作戦も間に合わなかったみたいだな。こうなったら降伏しかない」

リード中尉ががっくりとうなだれる。

着陸したホワイトベースにシャアのザクが突っ込む。

ブリッジのそばまで行きバズーカで狙いをつけて、お肌の触れ合い通信をする。

「今すぐ戦闘を停止し降伏しろ。従わなければブリッジを破壊する」

「通信兵、降伏すると伝える。通信兵オープン回線を開け。ホワイトベース艦長代理のリード中尉だ。ホワイトベースは降伏する。戦闘を停止しろ」

ホワイトベースの主砲や機銃が完全に停止したのを見てガルマは歓喜した。

「よくやった。よくやったぞシャア」

通信をオープン回線にしてホワイトベースに話しかける。

「こちら北米大陸方面軍司令官ガルマ・ザビ大佐だ。南極条約に則り正当に扱おうと約束しよう」

戦場にいたほとんどのものたちが、これで戦闘終了だと安堵した。しかしまだ諦めていない者がいた。

アムロは岩場の陰からホワイトベースめがけてガンダムを突っ込ませた。

目指すのはブリッジにバズーカを突きつけている シャアザク。

ブライトからのり変わったガンダム、ビームライフルもシールドも、持ってなく、ランドセルのビームサーベルも破壊されている。

完全に素手だった。

「よすんだアムロ。戦闘終わったんだ。ホワイトベースは降伏したんだ」

ガンダムに気付いたリード中尉が叫ぶ！

「まだ戦おうというのか、かまわんシヤア。木馬のブリッジを破壊しろ」

潔くない抵抗をする白いモビルスーツを見たガルマが激怒する。

しかしシヤアはブリッジを破壊しなかった。

できるわけがない。

先ほど 木馬から降伏を告げた通信兵はアルテイシアだった。

ミノフスキー粒子の影響をうけない、お肌のふれあい通信による、鮮明な映像音声は見間違えようがない。

「大丈夫だガルマ。武器を持たないモビルスーツなど蹴散らしてくれ」

シヤアザクはバズーカを2連射した。

難なくかわすガンダム。

「何にいいいー！」

『さっきまでの白いモビルスーツの動きと違う。今までの手ごわい動きだ。』

パイロットが変わったのか？』

前傾姿勢で突っ込んでくるガンダムに対し、左手でヒートホークを抜き放ち、

迎え撃とうとした時。予想だにしないことが起こった。

ドシューウウウウウ！！

ガンダムの上半身がシヤアザクめがけて吹き飛んだ！

そしてガンダムの上半身とシヤアザクがまともにぶつかり合う！

ノーマルスーツを着てないシヤアは、あまりの衝撃にめまいがした。

吹っ飛ぶシヤアザク！！

すぐにアムロは下半身からコアブロックを射出。

空中でコアファイターに変形させる。

「ガルマ大佐！ モビルスーツから戦闘機が！」

「見れば分かる！ うろたえるな！ たかが戦闘機一機！ 撃ち落とせ！」

「ガルマ大佐！ 新たに3機の戦闘機です」

「そういうことか。連邦軍のモビルスーツはコクピットのブロックが戦闘機に変形するのか。なかなか考えるものだな」

新たに現れた3機のコアファイターは、ブライト、リユウ、カイ。

コアファイターの数が足りずハヤトは別行動。

「敵の方がはるかに数が上だ。絶対に突っ込みすぎるなよ。常に動き回って攪乱するんだ」

コアファイターの経験が一番多いリユウが指示を出す。

「1機も4機も大して変わらん。殲滅しろ」

ガルマが冷静に言い放つ。

奇襲のため最初こそアムロ達は優勢だったが、時間がたてばドップ隊に数で劣るコアファイターの劣勢は明らかだった。

さらにホワイトベースは一発の弾もうっていない。

「リード中尉。今がチャンスです。ドップ攻撃してください」

アムロは何度もホワイトベースに要請したが帰ってくる答えは同じだった。

「コアファイター戦闘を中止せよ。ホワイトベースは降伏したんだ」

先ほどからセイラを押しつけて通信モニターの向こうで、

何度でも叫ぶリード中尉。

アムロとリユウは健闘したが数が違いすぎる。

ホワイトベースからの射撃がなければ絶対に勝ち目は無い。

アムロの作戦は完全に失敗した。

「アムロ！ このままじゃらんちがあかん！ 撤退しよう」

「どこに撤退するっていうんです、ブライトさん」

「この戦闘前に参謀本部と連絡がとれて、海に出ればなんとかなる。ホワイトベースが動けないならしようがない。コアファイターだけで海に脱出しよう」

「降伏でも撤退でもどっちでもいいから早く決めてくれ。死んじまうよ」

カイが泣き叫ぶ！

「分かりました撤退しましょう」

こうしてコアファイター4機は海めがけて撤退した。

「追撃の必要はない。木馬とモビルスーツが回収できれば十分だ」

ガルマの命令で戦闘は終了した。

海に向かったアムロたちはマチルダの補給部隊と合流した。

第3話

ホワイトベースから離れた場所で仰向けに倒れているシャアザク。
「当たり前が悪ければこんなものか」

ガンダムの上半身アタックで操縦系統がいかれてしまったらしい。
戦闘は終了しているわけだから、シャアはノンビリと回収を待っていた。

そこにホワイトベースから砂煙をあげながらバギーが向かってくる。

ホワイトベースの乗組員が、因縁のある赤い彗星のシャアの命を狙って、やけくそになって攻撃しに来たのかと思ったが違った。

「アルティシアア！」

「にいさん！」

兄妹が再会し抱き合う。

それを岩陰から覗き見るのはハヤト・コバヤシ。

ハヤトはコアファイターに乗れなかったため、歩いてホワイトベースに戻る途中だったのだ。

「アルティシア。時間が無いからよく聞くんぞ。このままジオンの捕虜になるのは良くない。セイラ・マスの名乗ればジオンダイクンの娘だと気づく奴が出てくるだろう。かといって今更、偽名を使えばホワイトベース乗組員たちがおかしいと思うだろう」

キヤスバルダイクンとアルティシアダイクンが、

エドワウマスとセイラマスに名前を変えたのは、知ってる者は知ってるのだ！

「どうすればいいの兄さん」

「このまま立ち去るんだ。さいわい軍服を脱いできたのはよかった」
「ええ。元々民間人が戦闘行為とかまずいのでしょうか。そういつたこと言ってる人がいたから念のため着替えたの」

「よし。ここから離れて近くの町までいくんだ。後から必ず迎えに行く」

「わかったわ」

ミデア輸送隊はロツキー山脈を南下してジャブローへむかっていた。

コアファイター4機のみで合流したアムロたちにたいして、ミデア輸送隊の隊長マチルダ・アジャン中尉は優しかった。

「あなたがただけでも無事でよかったです。よくぞ生き延びてくれました」

「そんなこといったって本当はホワイトベースやガンダムがなくて、ひよっこ4名だけですがっかりしてんじゃない？」

ひねくれものカイが言う。

「ジャブローではモビルスーツの量産が進んでいるわ。それにガンダムなどの実戦データがあるのとないのじゃ大違いよ」

「なるほど。じゃあ本命はパイロットの俺たちじゃなくてコアファイターだったのね。ケケケツ」

「だったら今すぐ降りてもらおうかしら」

「そいつは冗談キツイっすよマチルダさん」

ワハハハハッ！

あれほどの激戦のあとだからこそ笑うのだ。

深刻に考えると気がめいってしまう。

アムロ、ブライト、リュウ、カイの4名はすっかりマチルダ中尉に惚れてしまった。

海岸までとはいえジオンの勢力圏である北米までミデアのみで到達し、またジャブローまで帰ろうっていうのだ。

そのクソ度胸と美貌そしてユーモアも併せ持つ懐の深さに惚れてしまった。

「ミデアはVTOL、垂直離着陸ができるから山あいを飛んだりすれば案外みつからないものよ。護衛なんかつけたほうが、よっぽど危険かもね。もっとも護衛を断ってるわけじゃなく人手不足でつけられないだけけどね」

ミデアのみで怖くないのかと聞いたら、あっけらかんと笑顔で答え

てくれた。

ミデア輸送隊では楽しいひと時をすごせたが、ジャブローに着いたら過酷な日々が待っていた。

「よくも連邦軍最新鋭の艦とモビルスーツをむぎむぎと失ってくれたな」

ジャブローについてすぐにあわされたのはゴップ大将だった。

ねちねちと責め立てられうんざりした。ホワイトベースの活躍を認めてくれていると言うレビル將軍は現在ジャブローにはいないから、目の前の醜悪な肥満したゴップ大将がジャブローで一番偉いらしい。

マチルダ中尉からレビル將軍がジャブローに戻ってくるまでの我慢だと聞かされていたアムロたちだが、1時間たりとも我慢できそうになかった。

「あの、ちよつといいですか?」

ゴップ大将の長話を30分ほどでどうしても我慢できなくなったアムロが口を開きかけたが、

「貴様! 大将閣下の話を遮るのか!」

ゴップ大将のそばにいた将校にぶん殴られた。

何ていうことだ。こんな前時代的な暴力がはびこっている軍隊なんて腐りきっている。

殴られるのは嫌だから黙って聞いていたが最終的にはとんでもない話になっていた。

ゴップ大将の話を要約すると・・・

ホワイトベースとモビルスーツを失ったのは素人だからまあ許してやろうと言うことだ。

しかし民間人が軍の最重要機密であるホワイトベースとモビルスーツを動かしたのは許しがたい。

これはルナツーでも言われたことである。

よって、アムロとカイはサイド7で現地徴用兵という扱いになっ

た。

そして新兵訓練を受けてもらうということだ。

正規の軍人であるブライトとリュウは、士官候補生としてパイロット候補生として再特訓ということになる。

第4話

その後、新兵用の宿舎に移動。
これがまた狭くてボロい部屋。
しかも個室ではなく相部屋だった。
殺風景な部屋に二段ベッドが二つ。
アムロ達四人はここで暮らすことになるのだ。

翌朝午前4時起床。

アムロとカイは新兵訓練、いわゆるブートキャンプの開始だ。
ランニングから始まり、腕立て伏せ、腹筋、スクワット、そして粗末な朝食。

ホワイトベースでの食事はアムロはパイロット用の食事をとっていた。

あれは大してうまいものではなかったが、ここの朝食に比べたら何倍もうまい。

朝食が終わったら施設の掃除。

ちよつとでも塵ひとつでも見逃さうものなら、教官のラルフ中尉の鉄拳が飛んでくる。

この鉄拳は文字通り鉄の拳。

ラルフ中尉は戦争で左手首から先を失い鋼鉄製の義手をつけている。

この鉄拳に比べたらホワイトベースでブライトに殴られた2発なんて可愛いもんだ。

掃除が終わったらまた基礎体力のトレーニングが待っている。あまりにも厳しくてトレーニンング後の昼食はろくに食べられない。

実際にアムロはゲロを吐いた。

昼飯の後は座学が待っている。

座学と言うと楽そうに聞こえるが、午前中の肉体的疲労と昼飯の相乗効果で強烈な睡魔が襲ってくる。

もちろんちよつとでも、うとうとしようものなら鉄拳が飛んでく

る。

座学が終わると今度は軍隊格闘術、しかも屈強なラルフ中尉の部下が実戦形式で教えてくれる。

夕方7時に訓練終了。

夕食を食べ、ようやく部屋に戻ってきたアムロとカイ。

「アムロ、こいつはだめだ。こんなの続けてたら死んじまうぜ」

「僕も同じ意見です」

訓練中は私語禁止のため、ようやく会話をすることができた。

訓練中は私語だけでなく教官に対しても話しかけることは許されない。

しかも教官に話しかけられた時はイエスサーしか答えることは許されない。

「これだったらジオンに降伏してた方が良かったぜ」

「それには同意しかねますね。あれだけジオンの部隊を倒してきましたからね。捕虜になったら殺されてたかもしれませんよ」

「でも南極条約つてのがあるんじゃないのか」

「毒ガス使ったりコロニー落としたりするような軍隊ですよ」

「そうだな。それよりブライトたちはどうなってるんだろ。奴らは士官候補生だから楽しんでんじゃないの」

アムロとカイがシャワーを浴び終わった頃、ブライトとリュウが帰ってきた。

カイが新兵訓練の内容を説明。

「俺たちだって散々な目にあつたよ。士官候補生だから顔は勘弁してくれたらしい」

そう言いつつブライトとは上着を脱いだ。体中アザだらけだった。

「ちくしょうなんで俺たちはこんな目にあわなきゃなんねんだ」

「さあな考えてもしようがねえ。とにかく早く寝ることだ。俺も新兵訓練の時はすぐに寝ていた。眠らないと体が持たないぞ」

「まっつてくれよ消灯時間は9時だって聞いてるぞ」

「馬鹿野郎。1分でも早く寝ろ。眠らないやつから脱落していくんだ」

プライドとリュウがシャワーからもどってきた後、消灯して寝た。

「ザクを何機倒したか知らないが、調子に乗ってるんじゃないぞ！貴様は虫けらだ」

「イエツサー」

「ニュータイプだなんて言われてるらしいが、いい気になるんじゃないぞ！貴様は蛆虫だ」

「イエツサー」

「大尉の息子らしいが、親の七光りなんぞ通用しねえからな。甘ったれてるんじゃないぞ！」

「イエスサー」

一週間経つてようやく過酷なトレーニングに慣れてきたら、ラルフ中尉の言葉による攻撃が激しさを増してきた。

アムロは何度もブチギレそうになるが、ブチギレてもいいことはひとつもないのは分かっているから耐えるしかない。

逃げることもできない。

ジャブローは地下にある基地。地上への出入り口は厳重に監視されている。

仮に何らかの方法で地上に出たとしてもそこは南米アマゾンの密林。

どうしようもない。

あまりにも理不尽な暴言に、とうとう我慢できなくなりブチギレようとした昼下がりのアムロ。

その時ようやく助け舟が現れた。

「新兵訓練は中止だ！ラルフ中尉やめたまえ」

「どういうことですか大尉。いったい誰の命令ですか？ こっちはゴッパ大将から、厳しく訓練するように仰せつかっているんですよ」
「レビル將軍、直々のご命令だ。ゴッパ大将も了承済みだ」

第5話

ジオン公国、首都ズムシティー総帥府。

デギン公王、ギレン総帥、ドズル中将、キシリア少将の4名がそろっていた。

ザビ家独裁のジオンではこれが最高会議といっても言い過ぎではない。

「ガルマはよくやってくれた。技術的にはホワイトベースには大した価値はなかったが、ガンダムのビームライフルが入ったのはではないな。これで我が軍でもビーム兵器の量産にはいれる。よってゲルググの量産を早める。現在生産中のドムの生産ラインはゲルググに切り替える。」

そして完成したドムはオデッサに最優先でまわす」

ギレンが淡々と喋る。

「やはりオデッサで決戦か。ソロモンからも増援をだすぞ」

ドズルが意気込む。

「そのことですが、ドムは優先でもらいますが、他の部隊はいりません。いまさらザクやグフは必要ありません」

キシリアが断る。

「何を言う。戦いは数だよ！キシリア！オデッサは地球の最重要拠点だぞ」

「ですからドムは受け取ります。あと必要なのはエースパイロットです。少数精鋭でレビルを倒してみせます。数ではなく優秀なパイロットをよこしてください」

「キシリアよ。自信があるのか？」

「オデッサにレビルを引き込んで殲滅します。兄上は連邦宇宙軍がオデッサに増援を降下させないようにしてくれればいいのです。マクベの策で勝って見せます」

「しかしルウム戦役以上の重要な戦い、おまえ一人にまかせるわけにはいかん」

「作戦の指揮はマクベがとりますが、私もオデッサに降ります」

「そこまでの自信があるのか、しかし・・・」

「よい、ドズル。そこまで言うのならキシリアにまかせよう」

ギレンはキシリアの案を認めた。慎重なキシリアがオデッサに自らいくのなら必勝に近い策があるのだ。少しでも危険があればキシリアは行かないはずだ。

「もしレビルを殲滅できたら、ユーラシアは全てジオン勢力にできるな。うまくいけば戦争はおわるな」

もともとルウム戦役の後に連邦は休戦条約を結ぼうとしていた。それを捕虜から脱出したレビルのせいで戦争継続にかたむいたのだ。国力の劣るジオンとしては早期講和をしたかった。

「休戦にならなくても問題ない。もうすぐマッドアングラーが完成する。これで大西洋の制海権は簡単にとれる。オデッサからの進撃と、マッドアングラーが西から攻めればベルファスト陥落。」

ゲルググが量産されたらドズルはルナツーを、キシリアは陸海空からジャブローおとせば完全勝利。中途半端に休戦条約よりよいかもしれません」

ギレンが雄弁に語る。

「開戦以来、総人口の半分以上が死んでいる。ギレンよ、まだ殺したりんのか」

「開戦前の100億以上の人口などで異常ですよ。もつと少なくともよいくらいです。これ以上むやみに増やさず優良な者のみを残しコントロールします。それ以外に人類の永遠の平和は望めません」

「しつておるかヒットラーを？」

「ヒットラー？中世期の人物でしたかな？」

「世界を読みきれなかった独裁者だ。貴公はヒットラーの尻尾だな」

「いつになく喋りますな父上。ヒットラーの尻尾の戦略をごらんにいれましょう」

「そうか・・・それよりガルマのことだが、ホワイトベースとの戦いの記録をみたが、あぶなっかきすぎる。シャアがいなかったら戦死もありえた」

「しかし自ら出撃してホワイトベースをしとめた。見事なものだ。あ

「いつならいずれ俺さえも使いこなしてくれる將軍になるはずだ」

ドズルがかたる。デギンとドズルはガルマの将来に期待しているという点では共通している。

「わたしとしてはシヤアにガルマの側にいてほしい。士官学校からの親友だそうだな」

「たしかにシヤアは優秀だ。しかし配下のエースをオデツサに送って、シヤアまでガルマのところにとどめたら、ソロモンが薄くなりすぎるな」

「オデツサが終わればパイロットはソロモンにかえしますよ兄上」

「よいではないかドズル。オデツサが終わるまで宇宙では大きな戦はおこらんよ」

「わかった」

これで話は終わった。しかし解散する前にキシリアをデギンが呼び止める。

「キシリア、ガルマのことだが・・・」

ギレンとドズルは去っていく。いつものことだ、キシリア麾下のガルマについてデギンはうるさい。

ひとしきりガルマを危険な目に合わせるなどか言った後・・・

「ギレンは危険すぎる。もしもの時は頼むぞ」

「はい」

これだけで伝わった。オデツサで勝っても負けてもギレンは、デギンにとってもジオンにとってもリスクキーだ。頼めるのはキシリアのみ。

ドズルはバカでガルマはまだ若すぎる。

具体的なことは今は必要ない。

第6話

ガルマの部隊にやられてから1ヶ月後、アムロはオデッサにいた。レビル將軍の部隊の最前線、新しいガンダムG3に搭乗している。傍らに居るのはブライト、リュウ、カイの陸戦ガンダム。

レビル將軍の連邦軍は北から南下してオデッサの正面に布陣した。エルラン中將は東から側面攻撃を担当する。

レビル將軍とエルラン中將の部隊は戦力比6対4。

これだけの大兵力ならオデッサの陥落は時間の問題だとアムロは思った。

しかしビッグトレーで指揮をとるレビル將軍は危うさを感じていた。

「推定ですがこちらの数は、オデッサの兵力の3倍の兵力だと思われるます」

レビル將軍の側近が自信満々にしゃべる。まるで分かってないとレビル將軍はがっかりした。

ゴップ大將のようなジャブローのモグラたちが反対しなければ、4倍の兵力は集められたはずだ。しかもモビルスーツの数がジオンに比べて圧倒的に少ないはずだ。レビルからしてみれば5倍くらいが理想だ！

ルウム戦役の後、モビルスーツ量産計画に反対したのはゴップ大將だ。

全く無能な人間というわけではないが、モビルスーツの有用性を全く分かっていない。彼は未だにフライマンタなどの航空戦力でジオン倒せると思っているのだ。

ゴップ大將はジャブローでよく言っていたものだ。

「ルウム戦役の結果から宇宙では、宇宙だけならモビルスーツは有効だと認めましょう。しかし地上は別です。重力のある地上なら空からの攻撃の方が有効なはずです。モビルスーツに費やしたお金があれば、フライマンタの大軍勢を作った方が良かったと思うんだけどね」

これだけではなく優秀なパイロットであるアムロレイたちをいたずらに体罰で疲弊させるなど許しがたい。

モビルスーツ開発をこり押ししたレビルへの当て付けなのだろう。

ゴツプ大将のように自らは前線で戦わず、階級の高いものは後方支援に徹していればいいのだ。

「しかし予想以上に上手くいきましたな。宇宙から降下してきたジオン部隊は少数しか確認できておりません。さらにヨーロッパ方面軍やアフリカ方面軍、アジア方面軍からの増援もありません」

側近が嬉しそうに言う。

だからこそだ、だからこそ危ういのだ。

ジャブローからベルファスト。そして 北海を渡りワルシヤワを通ってオデッサに着くまで、抵抗らしい抵抗は全くなかった。これはマクベの策なのかキシリアの策なのか知らないが、オデッサの決戦に絶対の自信があることを表している。

もちろんこんな考えは部下の前では話さない。弱気な話をして士気を下げてもしょうがない。

ルウム戦役以上の激戦になるなどレビル將軍は腹をくくった。

大まかな配置は終わったが、細い配置を決めている途中、数で劣るジオン軍からの攻撃が開始された。

アムロたちガンダム隊の士気は高かった。

ゴツプ大将のいじめのような仕打ちから救ってくれたレビル將軍への恩がある。さらにホワイトベースを失った自分たちに新しいガンダムを回してくれた。

アムロたちは全員少尉にまでなった。もともとブライトは前から少尉だった。

オデッサに着くまで連邦軍の人たちはガンダム隊を見下していた。レビル將軍のお気に入りということ喧嘩を売られたりすることはなかったが、冷たい対応をされてきた。

唯一、親しげに話しかけてくれたのは現在、左隣に布陣しているアマダ隊のシローアマダ隊長ぐらいのもんだ。

戦闘は急に始まった。オデツサ基地からの砲撃。さらに空中に散らばるドップ。そして地上を砂煙を上げながら突っ込んでくるモビルスーツ部隊。

「新型がいるぞ。早いぞ」

カイシデンが叫ぶ。

先頭を切って突っ込んでくるモビルスーツは見たことがなかった。驚いたのは足を使って走らずに、滑るように高速で移動していた。

「ホバー移動だ」

リユウホセイも叫ぶ。

「当たれ！」

射撃の得意なブライトが陸戦ガンダムのロングレンジライフルを放つがかわされる。

ビームライフルの射程距離に入ったからアムロも撃ちまくるがなかなか当たらない。

距離が詰まってきて接近戦となる。

ロングレンジライフルからビームサーベルを抜くのに手間取ったブライトが、スカートをつけたようなホバー移動のモビルスーツに撃破された。

式度も殴られた恨みはなかった。ジャブローのシゴキを経験した後では、ブライトからの2発など、なでられたようなものだ。

しかし続々と突っ込んでくる敵モビルスーツの嵐の中で悲しむ余裕もなかった。

最初の交錯が終わった後、あたりはすごい砂煙で視界が悪く、他の部隊との連携は無理だと思ったアムロ。

「ここから混戦になります。僕たちの部隊だけでも密集連携して戦いましょう。でないと新型には勝てません」

それから、しばらく戦ったが、ザクを3機たおしたただけだった。

時々見えるスカート付きには攻撃が回避されてばかりだった。最も敵の方もガンダムが手強いと見て仕掛けてくるものはいなかった。

「どうやらここら辺には敵がないみたいですね」

突っ込んできた敵は、そのまま奥に行ったようだ。

「そうだな。どうする。オデッサの基地に仕掛けるか？」

「でも抜けていった敵モビルスーツがどうなったか気になります」

「確かにそうだな俺たちガンダムチームだけでオデッサに突っ込んで
もしようがないしな」

ここでレビル將軍のビッグトレーから全部隊に通信が入る。

エルラン中將が裏切った！

第7話

オデッサの戦いが開始する直前。

マクベは勝ちを確信した。

「キシリア閣下。これは勝利間違いないでございます」

オデッサ基地司令室、マクベ大佐は得意気に勝ち誇っていた。

「そうでなくてはな。期待しているぞ」

満足気にキシリアが答える。

マクベは副官のウラガンに攻撃開始の合図を送る。

「これだけの大部隊が激突すると砂煙でみれたものではないのでこちらのモニターをご覧ください」

大型モニターにはオデッサ周辺のマップと青と赤のマークが書かれている。

「こちらは上空からの映像を基にコンピュータグラフィックスでリアルタイムで表示されます。青が連邦軍、赤がジオン軍です。早速モビルスーツ部隊が敵の前線を突破しました」

「捕獲したガンダムのスペックを見た時は驚きましたが、量産された連邦のモビルスーツ、ジムは大したことないみたいです。もちろんパイロットの技量の差もあるのでしようが、こちらのドムの方が圧倒的です」

「ガンダムのスペックには私も驚いた。だがあれほどの高スペック機体、いくら連邦でも大量生産なんてできるわけがない」

「おっしゃる通りです」

「レベルのビッグトレーまでだいぶ厚みがあるが届くのか？」

「最前線で足を止めて戦わずに、奥に奥に進むように指示を出しております。ホバー移動が可能なドムならそれは容易なことです。前線の敵モビルスーツは砂煙にまみれて周囲の状況を把握するの時間がかかるはずですよ。その間に可能な限り突き進みます」

「そうか。しかし航空部隊は押されているようだが」

「それも想定内です。こちらのドップより連邦のフライマンタの方が性能は上です。しかも数が多い。なるべく押される形でオデッサ基

地上空で戦ってもらいます。そうすれば基地からの対空攻撃が生きてきます」

「あれだけの数をドップと基地からの対空攻撃だけでなんとかなるのか」

「さらに秘密兵器があります。ウラガン、アツザムをだせ」

オデッサ基地から出撃したアツザムがフライマンタを次々と撃ち落としていく。

「あれがモビルアーマー第1号だな」

大型モニターでは赤のマークが青のマークを突っ切り後方にまで出た。

「キシリア閣下。モビルスーツ部隊が敵の背後まで突き進んだようです。ウラガン、エルランに合図を送れ」

大型モニターで青のマークが4割ほど赤に変わった。

「意外とあっさりうまくいったな」

「裏切り者が土壇場で躊躇するのはよくあることですが、最初にあれだけ我が軍の圧倒的なモビルスーツ部隊を見たら裏切らないなどという選択肢はありませんよ」

「レビルめは、エルランとオデッサを側面攻撃するつもりだったのだろうか、自分がオデッサとエルランに側面攻撃をされているというところか。マクベ見事であった。全てそなたの手柄だ」

「ありがたきお言葉。しかしエースパイロットがよくやってくれました。これだけのエースパイロットを集めていただきありがとうございます。半端なパイロットではここまでうまくいかなかつたはずですよ」

「そうだな。アナベルガトー隊、ランバル隊、シンマツナガ隊、黒い三連星、ジョニーライデン隊、闇夜のフェンリル隊、サイクロプス隊」

「そうそうたる顔ぶれですね。いないのはシャアアズナブルぐらいのものでしょうか」

「シャア中佐か。できれば私の配下に欲しいな」

「シャア少佐ではないのでしょうか」

「ホワイトベースとガンダムを捕獲した功績で昇進した。ちなみにガルマも昇進して今はガルマザビ准将だ。マクベもこの戦の功績で准将になるはずだ」

「ありがたい話です」

大型モニターでは次々と連邦の青いマークが消えていく。

「後はレビルを倒しきれるかどうかな、ルウムの時のように生き残られるとやっかいだ。それから各方面軍に徹底的に侵攻をするように伝えろ」

ヨーロッパ方面軍、アフリカ方面軍、アジア方面軍はオデッサの戦いには参加していない。キシリアは、その温存部隊で一気にユーラシア大陸アフリカ大陸を制覇するつもりだ。

第8話

アムロがレビル將軍のビッグトレーのそばまで行った時には、ジオンのモビルスーツに囲まれていた。

連邦軍のジム部隊も多数駆けつけていたが、次々と倒されていく。ジムもビーム兵器を持っているため、決してドムに劣るといわけではないが、パイロットの技量に差がありすぎた。

アムロでさえスカート付きには手を焼いているほどなのだ。

連邦軍のモビルスーツパイロットはオデッサが初の実戦だということもたたくさんいるのだ。

ビッグトレーのレビル將軍から撤退命令が出された。

退路を塞いでいる北のモデルスーツを排除しろとのことだ。

北の包囲を突破しようとガンダムを突っ込ませるが敵は上手だった。

距離を取って上手く交わされる。

「なんだこいつら急に消極的になりやがったぞ。もしかしたらいけるか」

カインデンが叫ぶ。

「そうじゃないんです。もう勝ちが決まってるから無理な攻めをする必要はないんですよ。時間が経てば東からエルランの部隊がやってくるから、それを待ってるんですよ。敵からしたら今無理に攻める必要はないんですよ。敵は、とんでもない熟練のパイロット達ですよ」

スカート付きが近づいてこないため、射撃戦になっている。だが当たらない。

そしてビームライフルのエネルギーが空になった。

アムロは一旦ビュクトレイのモビルスーツデッキに予備のビームライフルを取りに入った。

ここでシールドを捨て両手にビームライフルを装備した。

「アムロ！ シールドもなしで大丈夫か？」

前線に戻るとリュウホセイが声をかけてくる。

「このくらいしないと、この包囲は突破できませんよ。僕が突っ込

みますからカイさんとリュウさんは援護お願いします」

両手のビームライフルを乱射しながらガンダムを突っ込ませると、さすがにスカート付きは怯んだ。

この間にビッグトレーが前進してくれていたらよかったのだが、敵モビルスーツに囲まれ、ろくに前進できないようだった。

ビッグトレーの指令所ではレビル將軍の幕僚たちが大騒ぎしていた。
た。

「エルランめふざけやがって」

「あの裏切り者め」

「北だ！北の包囲を突破しろ」

「ジム部隊は何をやってるんだ」

そんな混乱の中レビル將軍は立ち上がった。

それだけで周りの連中の騒ぎがしずまる。

歴戦の將軍の貫禄というものであろう。

「ビッグトレーを北に前進させろ。モビルスーツ部隊に退路を切り開いてもらうのではなくて、ビッグトレーで自ら退路を切り開くつもりで突貫させろ」

「そんな！ムチャです。スカート付に蜂の巣にされます」

「ビッグトレーの装甲なら大丈夫なはずだ」

ビッグトレーは移動司令基地と言われる程で、でかく頑丈にできている。ビーム兵器ならともかくバズーカなどの実体弾ではそう簡単に落とされはしない。

「しかしいくら装甲が厚くても何度もくればいつかは・・・無茶です」

「東からエルランの部隊がやってきたらその無茶さえできなくなるぞ」

「ドラゴンフライで脱出するのはどうでしょう」

ビッグトレーのブリッジ上部には小型ながら飛行甲板があり軽飛行機ドラゴンフライの発進ができる。

「こちらの航空部隊が健在ならそれもありだが、フライマンタ部隊はドップと敵の新型モビルアーマーで壊滅状態だ」

即座にレビルは否定する。

軽飛行機での脱出は、本当に最後の最後での手段だ。

「それなら西に、西に退路を取りましょう。北にスカート付き、東にエルラン、南にオデッサ。西にもモビルスーツはいますが北ほどではない」

その幕僚の言葉に他のものも同調しだした。それを聞いてレビル将軍は呆れ果てていた。

開戦からの一週間戦争、ルウム戦役で甚大な被害を受け多くの被害を出し、この程度のことわからないものたちが将軍の幕僚として存在している。

まさにこれこそが連邦軍の最大の弱点とも思えた。

連邦軍はベルファスト基地から北欧を通ってワルシヤワで集結。

その後、南下しオデッサに進軍した。

そのルートを逆に撤退すれば間違いなくベルファストまで戻れるはずだ。

これが北ルートの撤退である。

この戦場では北の退路はスカート付きに囲まれて突破しづらいが、そこさえ突破すれば比較的安全にベルファストまで戻れる。

それに比べて西ルートはどうか？

この周辺では、確かに西の包囲は薄い。

フランスのドーバー海峡を渡れば最短でベルファストにかえることができる。

しかしオデッサの戦いに参加していないユーリケラーネ少将率いるジオン軍ヨーロッパ方面軍はイタリアにいる。

イタリアから北上してきたヨーロッパ方面軍とフランスで激突するはずだ。

そんな中、退却しながらドーバー海峡なんぞ渡れるもんじゃない。

兵法において敵を完全包囲せずに、逃げやすい場所を作っておくのは初歩中の初歩。

間違いなくキシリアやマクベはワザと西をあけている。
歳はとりたくないものだ。
ルウム戦役以上の疲労感を感じていた。

ようやく北に前進を始めたビッグトレーの前でアムロは奮闘していた。

十機撃墜までは数えていたがそこからはもう無我夢中で数えてない。

ようやく突破の糸口が見え始めてきたころ、更なる試練が襲う。
ビームライフルの弾が尽きた。

ようやく突破しかけたのにビッグトレーに戻ると台無しになる恐れがあった。

まともに戦えているのはガンダム部隊だけなのだ。

カイシデンとリュウホセイの陸戦ガンダムは 性能ではスカート付きに勝っているようだが、パイロットの腕前としては劣っているで互角。

自分が何とかするしかない。

腹をくくったアムロはビームライフルを捨て、両手にビームサーベル二刀流。

ビームライフルを捨てたガンダムを見て、チャンスと捉えたのか、右前方から一機のスカート付きが突っ込んでくるのが見えた。

「ビームライフルがなくてもやってやるー」 叫ぶアムロ。

バズーカを打ちながら突っ込んでくるスカート付き。

かわしながら左サーベルでバズーカを切断し、右サーベルでとどめを刺そうとした時。スカート付の背後から、もう一機のスカート付きが現れた。

『くそッ！2機が重なっていたのか！』

G3ガンダムにはマグネットコーティングが施されている。その超絶反応により2番目のバズーカを横っ飛びに交わすことができた。

しかし3機めのスカート付きが バズーカを打つ。

「3機が1列になっていたのか!」

バズーカを食らってガンダムが左肘が吹き飛ばす。とどめを刺そうとしてくる3体のスカート付き。それを防ごうとするカイシデンとリュウホセイ。

敵の狙いはリュウホセイに移ったようだ。

最初のバズーカでシールドが吹っ飛ばされ、二発目の直撃で撃破された。

「リュウキーン!」

さらなる絶望が通信装置から聞こえる。

「機関部をやられた! ビッグトレーは行動不能。レビル将軍はドラゴンフライで脱出される。モデルスーツ隊は援護。フライマンタ部隊は護衛に付け」

ビッグトレー上部からドラゴンフライが飛び立とうとする。

上空ではフライマンタは劣勢だ。

さらに敵モバイルアーマーがフライマンタを蹴散らしていく。

援護しようとジム隊は上空にビームを撃つ。

上空に気を取られたその隙をスカート付が見逃すはずがない。

さらに討ち取られるジム。

ビームライフルのないアムロにはどうしようもなかった。

ガンダムのジャンプでも届かない!

飛び立とうとしたドラゴンフライが、スカート付きのバズーカで撃ち落とされた。

レビル将軍。戦死!

連邦軍の戦線は完全に崩壊した。

第9話

レビル將軍が戦死してからアムロがカイシデンに向かって言ったのは意外なことだった。

「カイさん。まずはビッグトレーで武器を補充しましょう」

「おいおいそんなことしてる場合じゃないだろう。さっさとずらからうぜ」

周りの連邦軍は包囲の厚い北を避けて西に向かって進んでいた。

「何言ってるんですか撤退戦ですよ。ベルファストまで先は長いんだ。弾切れなんかじゃ戦えませんよ」

アムロはビッグトレーに向かっていく。

「おい危ないぞ。ビッグトレーがやられたら爆発に巻き込まれるぞ」

「レビル將軍は死んで行動不能になったビッグトレーを攻撃しても仕方ないじゃないですか。撃破するよりも今の状況で戦後に捕獲した方がジオンからしてみたら得でしょ」

「そりゃ確かにそうだけど」

実際にビッグトレーには簡単に入ることができた。

モビルスーツデッキで補充を開始する。

カイシデンの陸戦ガンダムはマシンガンを装備している。

予備のカートリッジを補充するだけだ。

「お前はとんでもないクソ度胸だな。アムロ、そんな装備で大丈夫か？」

G3ガンダムはシールド背中に取り付け、サーベルを2本補充して、右手にはハンマーを持っていた。

「これがいいんですよ。ビームライフルなんかはすぐに弾切れしちやいますからね。こいつでいきます」

さっさと補充終わらせ、外に出る。

「まだ北にモビルスーツがいますね。西に逃げた部隊を追いかけてつてくれるとありがたかったんですけど。しょうがないです。僕たちも西に行きましょう」

部隊として撤退なら北ルートを進むべきだが、レビル将軍が戦死してから統制はとれてなく崩壊している。

てんでバラバラに連邦軍は西に向けて逃げ回ってる。

アムロとカイだけで北のスカート付は突破できない。

「なんか出遅れちゃってない」

「大丈夫です。ジムなんかよりこつちの方が全然早いですから。すぐに追いつきますよ」

G3と陸戦ガンダムが西に駆け出した。

オデッサ基地の司令室。マクベとキシリア。

「最後の最後まで見事な手際だなマクベ。兵法通りといったところか」

「はい。完全に包囲すると死に物狂いになって戦うので西をあけました。北に逃げられるよりも、西ならヨーロッパ方面軍と挟み撃ちにすることもできます。多分ほとんどのモビルスーツはベルファストまで帰りつけないはずですよ」

「損害の方はどうか？」

「大体ですがモビルスーツは数十機ほど撃破されています」

「あれだけ一方的な戦いだった割には結構被害が出たな。まあでも想定内だな」

「レビルを守るために火事場の馬鹿力を発揮したみたいですよ。まだ確定ではありませんがほとんどがガンダムにやられたみたいです」

「ガンダムか。厄介だな」

「キシリア閣下の申される通り、凄腕のエースパイロットが高性能機に乗ったら凄まじいことになりますな」

「そうだな。ドズル中将は戦いは数だとか言っているが、質も大事だ。ギレン総帥ももっと予算を割いてくれれば、もっと早くフラナガン機関で優秀なパイロットを育成できるものを」

「ニュータイプ部隊ですか？」

「これからは確実にニュータイプの時代が来るよ」

「あのガンダムのパイロットもニュータイプなのでしょいか？」

「たしかなことはわからないが、その可能性はあるな」

後にキシリアは、ドムに乗ったエースパイロットの大多数がG 3ガンダムに落とされた事を知ると、アムロレイをニュータイプだと断言した。

カイシデンにとっては地獄のような撤退戦だったが、アムロレイにとっては途中までは思ったよりも楽な撤退戦だった。

最初の頃はある程度固まって逃げていた連邦軍モビルスーツだが、追われているうちに散り散りとなってしまった。

逃げる方がバラバラに逃げるなら追いかけるほうもバラバラに追いかける。

襲撃してくるスカート付きは2機か3機。G 3ガンダムと陸戦型ガンダムのタッグの前では餌食になるだけだった。

ドイツに入るまでにアムロは12機のスカート付きを撃破した。

カイは2機撃墜。

「アムロ、お前はやっぱバケモンだぜ。一対一とかだったら誰もお前にはかなわねえんじやねえの」

「そんなわけないでしょ。世の中、上には上がいますよ。今はガンダムの性能のおかげで勝てるようなもんですよ。赤い彗星のシヤアとかが同じ性能のモビルスーツで襲ってきたら勝てる気しないですね」

「そうか。それよりドイツに入ってから敵さん見かけねえな」

「そうですね。オデッサからだ、このくらいが引き上げ時ってところですかね。ドイツを抜けるまでは楽できるかもしれないですね。でもフランスに入ったら、今度はヨーロッパ方面軍との戦いになりますよ」

「まじかよ俺はもうヘトヘトだよ。アムロが居なかったら俺は絶対死んでたな」

フランスに入って襲ってきたヨーロツパ方面軍はアムロからしてみたら大したことはなかった。

アムロは知る由もないが、新型のドムがオデッサに優先配備されていたせいで、ヨーロツパ方面軍ではザクが主力だった。

ただし数はそれなりに多かった。

グフ2機機、ザク3機に襲われた時、アムロは簡単にハンマーでグフ1機とザク2機を撃破したが、その間に陸戦ガンダムが足をやられてしまった。

ヒートロッドの直撃を受け痺れてる間にザクのバズーカを腰にもらってしまった。

もちろん残りの敵はアムロが簡単に倒した。

「くそ！ 電撃ショックの影響かバズーカの影響か知らないが、足が動かなくなっちゃったぜ」

「わかりました。こっちのコックピットに乗ってください」

「悪いなアムロ。狭くしてしまうけど勘弁してくれ」

陸戦ガンダムをハンマーで叩き壊して 撃破し、ドーバー海峡を指す。

ドーバー海峡手前の森林地帯で友軍と合流することができた。ジム6機、ミデア2機、ホバートトラック5台。

ミデアにはマチルダ・アジャン中尉が乗っていた。

誰もがドーバー海峡に向かってるから合流できたのは必然なのだが、アムロレイは運命的なものを感じた。

「マチルダ中尉、どうしてこんなところに。ワルシャワにいたはずでは？」

連邦がオデッサに進行する前にワルシャワで集結した。

戦闘部隊がオデッサに向かった後、補給部隊はワルシャワに残っていたのだ。

ワルシャワからなら北上して北海に出れば、楽にベルファストまで

帰れたはず。

わざわざ危険なフランスまで友軍を助けるためにやってきたそう
だ。

さすがはマチルダ中尉といったところだ。

カイシデンにミデアに移ってもらってアムロたちはドーバー海峡
を目指す。

このときミデアのコンテナの中で、他の兵士たちにカイシデンはい
びられまくった。

「てめえらのせいで負けたんだよ。誰がこんな少年兵を採用したん
だ」

陸戦型ガンダムから降りてもパイロットスーツを着用していたの
で、パイロットなのはバレバレだった。

そして少年であること。特別扱いされているガンダムのパイロッ
トであることは誰の目にも明らかだった。

最初は黙って聞いていたカイも、あまりの暴言を聞いて、うっかり
反撃してしまった。

「俺は少尉だぞ。それが上官に向かったの態度か」

周りにいるほとんどは少尉よりも下の階級だった。しかしみんな
年上だ。

「ぶざけてんじゃねーぞこのクソガキが」

「礼儀がなってねえんじゃねえのか」

「放り出しちまえ」

「みんな、ここは俺にまかせろ。独立混成第44旅団ミケーレ・コレ
マッタ少佐だ。階級上だから何言ってもいいよな。」

少尉ごときで偉そうにしてる若造にはきつちりとお仕置きしてや
らねえとな」

「いいいぞー」

「やっちゃまってください少佐」

「修正してやってください」

ミケーレ少佐が 左手でカイシデンの胸ぐらを掴み、右手でぶん殴ろうと振りかぶった・・・

ドオオオオオン!

コンテナを激しい衝撃が襲い、中にいた人々は吹き飛んだ。

吹き飛ばされたカイシデンは壁に頭を打ち付けられふらつく。

「ヘルメットがなかったら死んでたぜ」

陸戦ガンダムから降りた後もパイロットスーツとヘルメットは着用していたのだ。

コンテナの反対の壁には、ぽつかりと穴が開いていた。

他の軍人は無事では済まなかったようだ。

ぐったりと倒れている者もいるし、うめき声をあげている者もいる。

ドーバー海峡は狭いところで幅30kmちよつと。

水深は深いところで55m。モビルスーツで渡るのは問題ない。

アムロは撤退戦で一番危険な最後列を歩いていた。

G 3ガンダムは腹部まで海水につかっている。

部隊の最後尾にいたアムロは見た。

ドーバー海峡を渡ろうとしたミデアやジムが海中からのミサイルにやられたのだ。

1機のミデアは爆発し、もう1機はコンテナにくらった。

さらに先頭のジムが撃破された。

「待ち伏せだ」

水中から見たこともないモビルスーツが顔を覗かせている。

爪がついた手の先からビームを撃ってくる。

「ジオンの水中モビルスーツ」

「おいガンダムの若造! てめえが最新鋭機に乗ってるんだから、てめえが行けよ」

馬鹿じゃないかとアムロレイは思った。

水中モビルスーツに海で戦えというのか、それよりも下がるのが先

だ。

陸の上で戦った方がいいに決まってる。

「とにかく下がってください。陸の上で戦いましょう」

ガンダムとジムはフランス側の陸地に上がったが、新型モビルスーツも躊躇うことなく陸地に上がってきた。

「こいつら地上での戦いにも自信があるのか。水陸両用ということか」

上がってきたジオンのモビルスーツは6機。その中の1機は赤かった。

「赤いモビルスーツ！シャアか！」

赤いモビルスーツにガンダムを突進させる。

ハンマーの一撃は軽々とかわされ、距離を取ってビームを打ち続けてくる赤いモビルスーツ。

次々と討ち取られていくジム。

アムロは赤いモビルスーツの相手をするだけで手一杯だった。

コンテナに空いた穴から慎重に外を覗き込むカイシデン。

モビルスーツの戦いは圧倒的にジオン軍有利だった。

見ている間にもジムが1機やられ、残り3機。

ホバートラック周りをうろちよろして全く役に立ってなかった。

「やべえー」

敵モビルスーツの1機がミデアにビームを撃ってきた。

直感的にカイはコンテナの穴から海に飛び込んだ。

海面に浮き上がり、飛び込んだのが正解だったことを知らされる。

ミデアは黒煙を上げ墜落し、地面に激突して大爆発。

「まじかよーマチルダさん」

海上から現在の位置を確認するカイ。

ドーバー海峡の真ん中ぐらい。

「泳ぐしかねえ」

カイシデンはイングランド側に向けて泳ぎ始めた。

第10話

ジオン北米方面軍はオデッサの戦いに合わせて軍を二つに分けた。ひとつは、ガウ攻撃空母、トップ、ザク、グフ。

これらは北米を南下してパナマを目指す。

地上軍の大多数をオデッサに振り分けた連邦軍に対して、今のうちにジャブロー攻略を有利にするため、南米の入り口であるパナマまで抑えようというのだ。

そしてもう一つはヨーロッパに向かった潜水艦部隊。

最新鋭の大型潜水艦マッドアングラーを旗艦としたマッドアングラー隊を率いるのは赤い彗星シャアアズナブル中佐。

もしもの時のためにジブラルタル近くで待機。

ありえないことだがオデッサでジオン軍が負けた場合は地中海に入り、ヨーロッパ方面軍とアフリカ方面軍を回収しなくてはならない。

『ガンダムを量産でもしてこないかぎり連邦に勝ち目はない。だが、いくら連邦の資金と資源をつぎこんでもガンダム量産はコスト敵に不可能だ。オデッサでは必ずジオンが勝つ』

シャアの読みは当たった。

それから部隊を二つに分け、シャア自身はマッドアングラーでドーバー海峡へ。

ユーコン型潜水艦三隻はブーン大尉に指揮を任せベルファストへ。

「水中からの牽制だけだ。絶対に地上に出て戦うな」

「わかりました。もしも敵が出てこなかったら。あと、出てきた敵を撃破した後はどうしましょう」

「そのまま待機。ベルファストに帰還するオデッサからの部隊を叩いてくれ。ドーバー海峡で全てを倒せるとは思わんし、北海経由で逃げてくる連邦軍もいると思うから。その時も地上では戦うな。水中から攻撃するのみ」

「分かりました」

サイド7では新兵のジーンが偵察だけというのを無視して攻撃を

開始したが、ブーン大尉なら大丈夫だろう。

マッドアングラー隊の部下はほとんどがシヤアよりも年上だが、みんな命令には従順だった。

本来なら、ドズル麾下のシヤアがキシリア麾下のマッドアングラー隊を率いるのはありえないことだ。

しかしそのありえないことをやってのけるキシリア少将は、相当な傑物だと言える。

シヤアを取り込みたいのだろう。

部下に、上官の命令は絶対だと教育が行き届いているようだ。

ムサイでシヤアの副官を務めていたドレンを始め、最初は若造のシヤアを舐めていたものも多かった。

もちろん実戦を重ねるうちにシヤアの優秀さに気付いた者達は素直に命令に従うようになった。

『シヤア、キシリア姉さんの方に移ったらどうか？もしもその気があるんだったらドズル兄さんには僕の方からも言っておくよ』

ガルマもそんなことを言っていた。

しかしキシリア直属になるつもりはなかった。

自分がキャスバルレムダイクンだとドズル中将などには一生バれない自信があつたが、ギレンやキシリアが相手だとそうもいかないと思う。

あまり近づきすぎるのは危険だ。

最も自分がキャスバルレムダイクンではなく、軍人として出世を望んでいる若者であれば、キシリアは理想の上司ともいえるかもしれない。

真つ正面からの戦いであればドズル軍の方が強いかもしれないが、総合的に見ればキシリア軍の圧勝だと思う。

武人タイプのシンマツナガ、アナベルガトー、ランバラルみたいなものたちがドズル軍では優遇されている。

キシリア軍では多種多様な人材がいる。オデッサ基地司令のマク

べなどはドズル軍では絶対に出世できなかったはずだ。

中には犯罪者を集めた部隊さえある。

金持ちであろうが貧乏であろうが、学歴であろうがなかろうが、家柄が良からうが悪からうが、優秀であれば取り立てるのがキシリア軍だ。

今までは地球連邦を倒すことを最優先に考えていたが、これからは戦後のことを考えねばならない。

そう思うシヤアアズナブルであった。

シヤアがドーバー海峡の水中に潜んでから、最初に遭遇したのはフライマンタなどの航空部隊がほとんどだった。

しかしそれは無視した。

水中から奇襲ができると言うこの有利な状況をフライマンタごときに使いたくはなかった。

もし1機でも討ち漏らしたらドーバー海峡にマッドアングラーが潜んでいることが知られてしまう。

航空戦力ごときはブーン達に任せておけば良いのだ。

しばらくして連邦軍のモビルスーツ部隊を発見し、水中から先制攻撃を仕掛ける。

とどめを刺そうと上陸したらジムのなかにまぎれていたガンダムを発見した。

「よくよく縁があるものだな。やはり生きていたかガンダム。ビームライフルもなく左腕もないようだが手加減はしないぞアムロレイ」

部下たちのズゴックには絶対にガンダムの鉄球の間合いには入るなど叫ぶ。

しばらくガンダムと回避を優先しつつ対戦していると、部下のズゴックが他のジムを撃破した。

ミデアも撃破したし、ホバートトラックなどの車両部隊はとつくに逃げ散らかしていた。

ズゴック6機にたいして手負いのガンダム1機。圧倒的に有利。

シャアの赤いズゴックめがけて鉄球をぶん投げてくるガンダム。バックステップで間合いの外まで下がるズゴック。しかし鉄球の鎖が伸びきる前にガンダムは手を離れた。

急なことだったので交わすことはできず右腕でガードする赤ズゴック。

右手のアイアンネイルがひん曲がる。

さらに急スピードでビームサーベルを抜き放ちながら迫り来るガンダム。

シールドを持たない赤ズゴック。

アイアンネイルぐらいではビームサーベルは受け止められない。ならば回避するしかない。

最大スピードで機体を上昇させる。

サーベルを空振りしたガンダムに対してズゴックたちがビームを撃つが、ガンダムはかわし海に飛び込んだ。

飛び込む最中のガンダムにビームが数発当たるが、背中のシールドに遮られて有

効打にならない。

「まさか。ズゴック相手に水中戦をするつもりか」

次々と追いかけて水に飛び込むズゴック。

サーベル回避でジャンプをしたため、海に飛び込むのが遅れたシャア。

急いで海に飛び込もうとする目の前で、勢いよく水中から飛び出すガンダムの上半身。

「くそー やられた。コアファイターで逃げるつもりか」

続けて水中から飛び出してくるコアブロック。

水中からビームやミサイルが飛び上がってくるが、水中からの射撃などそうそう当たるものではない。

空中で変形するコアファイターに対してシャアはビームを乱射した。

コアブロックの射出スピードは相当早い。

なかなか当たるものではない。

しかもコアファイターに変形した後はマツハ3のスピードで飛行することができる。

ガンダムを鹵獲して入手したデータであるが、脱出システムとしてはよく出来ていると感心せざるを得ない。

「賢いな、アムロレイ」

地上で脱出システムを作動させたらズゴックは6機いるわけだから絶対に撃ち落とせていただろう。

水中に潜った直後は水泡でモニターが見えづらい。

それを利用して水中からの脱出により、うまいこと逃げおおせた。

北米での戦いの時はモビルスーツの性能が同程度なら絶対に勝てる自信があつた。

しかし今は同程度のモビルスーツに乗ったとしても勝てる自信はなかつた。

アムロは完全にブチギレていた。

『絶対にもう連邦のためには戦わない。これからは自分の人生を生きる』

これから連邦軍がどうなるうがしつたこつちやない。

ブライト、リユウ、レビル將軍はオデッサで死んだし。ドーバー海峡でマチルダさんとカイの乗ったミデアも墜落爆発した。

有効的な人は全員死んでしまった。

もう連邦軍にいるいみはない。

ドーバー海峡から逃げたが、ベルファスト基地に帰るつもりはなかつた。

マツハ3で飛べるコアファイターならベルファストはあつという間だ。

ベルファストは丘に囲まれている、海岸の基地であり周辺に街がある。

見つからないように丘のむこうの森林にコアファイターを隠す。

ノーマルスーツを脱ぎ捨て、非常食などのはいつた緊急キットをもって歩き始めた。

ベルファストの街で宿を取ろうと思う。

ジャブローで、さかのぼってサイド7から軍人ということになっていたので給料は少々だが、現金にして手持ちがある。

街で情報収集してから今後の身の振り方を考えよう。

歩くと結構な距離だ。

丘をこえるとようやく基地と街がみえてきた。

あと少しだが、非常に疲れたので海岸沿いに、ぽつんとある空き家らしい2階建てボロ家に向かった。

とりあえず一休みして、居心地がよければ宿代節約のため泊まってもいいかも。

オデッサからずっと休みなしで限界だった。

ドアを開けようとしたら鍵がかかっていた。

近くの窓から中を覗き込むと人が住んでる感じだった。

もしかしたら住人がいるのかも、よっぽど貧乏なんだろう。

それか不法占拠とかかな。

呼び鈴ならしても返事ないから留守なのかな。

とにかく一歩もうごけないから玄関わきで座りこむ。

そして眠り込んでしまった。

アムロは目が覚めるとソファーに寝かされていた。

リビングのテーブルでは2人の子供がいた。

「姉ちゃん！おきたよおおう！」

男の子が叫んだ。もう一人の女の子が心配そうに見ている。

2階でドタバタ音が聞こえてきて、アムロとおなじくらいの少女がおりにきた。

「おきたのかい」

「なんかスイマセン。誰もいないみたいで・・・疲れちゃってたから。ありがとうございました」

「いや、いいんだよ。あたしたちも空き家を勝手に使ってるだけだから」

「そうなんだ。大変だね」

「戦争だからね。嫌なもんさ。ところであなた軍人さん？」

「え？」

「ほら物騒だからさ。ちよつと荷物見さしてもらったんだよね」

「そうなんだ。いやいや別に構わないですよ。ベルファストに戻るどころだったんだけど・・・」

「なんかワケありませんかね」

「オデッサで戦ってたんだけど負けちゃって戻りづらいんだよね」

「なんか失敗しちゃったの」

「いや、僕は失敗してないんだけど。こんな状況だから。基地に帰ってもジオンにやられるだけだなと思って」

「そっかー。確かにとんでもない敗戦みたいよね。ここの丘から基地が見えるけどモビルスーツなんて一機も戻ってきてないよ」

「え！ そんなにひどいの」

「フライマンタやミデア、ホバートトラックぐらいなもんよ。ミデアの中にモビルスーツがあったのかもしれないけどね」

「それじゃあもう駄目だろうな。ヨーロッパ方面軍に攻略されてしまいうだるうな」

「ベルファスト沖に潜水部隊も来てるみたいよ。帰ってきた連邦軍を攻撃してるわよ。本格的な基地攻撃はまだみたいだけどね」

「まずいな。早いとこ今後の事を考えないと・・・それじゃあもう行くよ」

「別にしばらくだったらいってくれてもいいよ」

「いいのかい。街で宿を探そうと思ったんだけど。泊めてくれるんだったら助かるよ」

カインデンは、ひたすら泳いでいた。

ドーバー海峡は渡り終わり、現在はブリテンからアイルランドにむ

けて泳いでいる。

そして無事、アイルランドにたどり着いた。
不良少年時代のカイシデンには絶対に無理だった。

『あのジャブローでのラルフ中尉の地獄のトレーニングにくらべたら』

もうひとつの理由はノーマルスーツを着ていたからである。

ドーバー海峡を泳いでわたるのに最大の障害は、長時間海水につかることでの体温低下だ。

ノーマルスーツは宇宙でもつかわれるものであるから、水もはいつてこず体温調節バッチリである。

『なんとかベルファストにつけば・・・アムロなら絶対いきてる』
その思いだけで歩きつづける。

だが、本当の本当に限界がきてたおれそうになる。

「くそつたれ！くそつたれ！」

絶望の極みにボロ家で、アムロに出会った。

少し仮眠をとったカイシデンにアムロレイは衝撃的なことをいった。

「カイさん。ジオンにいきましょう」

第11話

オデッサからベルファストまで無事に帰り着いたのはフライマンタのみ。

ドップよりも最高速度の早いフライマンタはドップを振り切りベルファストへたどりついた。

一目散に逃げた部隊はドーバー海峡がシヤアによって封鎖される前に通過できたのであった。

他の部隊はほぼ壊滅。

オデッサからドイツまでモビルスーツに追撃され、それを逃れてもフランスでジオンのヨーロツパ方面軍にやられ、ドーバー海峡でやられ、ベルファスト沖でブーン大尉の潜水部隊にやられる。

さらに、オデッサからドムを満載したザンジバルが二隻やってきた。

ザンジバルは宇宙からの援軍をのせてオデッサに降下したものだ。

一隻はドズル麾下の部隊をのせ、ランバル大尉が指揮官。

もう一隻はキシリア麾下の部隊をのせ、指揮官はジョニーライデン少佐。

彼らはベルファストからの抵抗がないため簡単に制圧したブリテンで集合し、ベルファスト攻略についてはなした。

キシリアからの命令で総指揮官はシヤアズナブル中佐になった。

黒い三連星などは不満があつたようだが、階級的には最上位のため仕方ない。

ここで情報交換をしてオデッサ決戦と追撃についての損害をランバルから知ったシヤアはおどろいた。

「ガンダムとアムロレイ、凄まじいものだな」

「砂煙で確実とは言えませんが、さらに追撃戦でやられたものは確認ができないわけですが、そういうのを含めても40機以上のモビルスーツがアムロレイにやられております」

「戦死されたおもなパイロットは？」「アナベルガトー、シンマツナガ、

サイクロプス隊とフェンリル隊のパイロットが戦死しています」

「それほどの損害か」

「ただ、G3ガンダムはシャア中佐が倒してくれたおかげで、ベルファストでは楽になりますな」

「だがアムロレイならジムに乗ったとしても、相当やると思う」

「けつきよく、この会議では明日の朝にベルファストに攻撃を仕掛けることに決まった。」

全員が出て行った中、一人でいるシャア中佐のもとに報告が入った。

「ベルファスト郊外で基地を見張らせてるスパイ107号のもとにガンダムのパイロットがいるようです。107号の説得もあり投降するみたいです」

ミハルのボロ家にシャアは自ら部下4名をつれていった。

夜間ということもあり、誰にも見られずに空き家に入ることができた。

家の中にいたのはアムロレイ、カイシデン、ミハルラトキエ、弟ジール、妹ミリー。

「アムロレイです、初めまして。直接は初めてですよね」

「そうだな。モビルスーツでは何度も会っているがね」

「俺はカイシデン。陸戦ガンダムのパイロットやった。最も機体は大破しちまったけどね」

「私はシャアアズナブル。よろしく。それで君たちの要求は？」

「まずは彼女に報酬を。これって結構でかい手柄なんだろう」

「それは当然だ」

部下のひとりが報酬をわたす。

「弟妹3にんで当分の生活に困らないだけの額だ。それでは、ここから先は外してもらおう。特に小さい子供には縁のない話だ」

ミハルたち3人は2階にあがっていった。

「それで、要求は？」

「捕虜になるならカリフォルニアで。ホワイトベースのみんなに会いたいですから」

「なるほど。私はかまわないが上層部はなんとかな。結局、キシリア閣下やギレン総帥がきめることさ」

「あれこれいえる立場じゃないのは承知してます。希望をいつてるだけですよ」

「そうかわかった。できるだけ君の希望に添えるよう上には掛け合ってみるよ。あとこちらからも提案があるのだが、ベルファスト攻略に手を貸す気はないかい」

早朝ベルファスト基地に戻ったアムロレイとカイシデン。

お偉いさんに怒鳴り散らされていた。

最新鋭のガンダムを失ったのを責められていた。

『本当にくだらない。連邦のこの理不尽な罵声を浴びせるっていうのは何なんだろうな。こんなことする暇があるんだったらベルファスト防衛のことを考えればいいのに』

うんざりしていたアムロだったが説教じみた怒鳴り声はすぐに止んだ。

ジオンのモビルスーツが基地に攻撃を仕掛けてきたのだ。

「空いてるジムがあるから、お前達もジムで出ろ。」

資金力に物を言わせて大量にジムを生産していた連邦軍だが、パイロットの養成が追いついていなかった。

モデルスーツ格納庫に着くと10機のジムが並んでいた。

「空いてるジムに乗って出撃しろと基地司令に言われたんだが」

「だったらあれだ。向こうの五機を使ってくれ。どれでもいいぞ」

素早くジムを起動したアムロレイとカイは、残りのジムを破壊する。

ハッチを開けているからビーム一発で無力化することができた。

「どうするアムロ。出撃したジムもやるかい」

「いや、やめときましよう。ジオンの連中には区別が付きませんから

ね。間違われて打たれても損ですから」

アムロとカイがモビルスーツ格納庫から出ようとした時、ベルファスト基地は降伏した。

次々と出撃したジムが、あっという間に撃ち落とされて、格納庫のジムまで破壊されたら負けは確定。最後まで戦い抜く根性がなければ降伏するしかない。

ベルファストを落とされた連邦軍は、一週間後に降伏した。

一週間ほどはなるべく有利な条件で停戦しようとおがいていた連邦軍の首脳陣たちだが、勝ちを確信したギレン総帥には通用しなかった。

デギン公王が乗り出してきたりもしたのだが、結局は無条件降伏ということになった。

しかし戦争は終わらない。

ルナツールのティアンム中將が降伏するのを拒否。さらにジャブローの徹底抗戦派が宇宙に脱出しルナツールに合流。

最終決戦地はルナ2となった。

ルナツール攻略はソロモンのドズルザビ中將に任された。続々と集合するゲルググを主力とした宇宙攻撃軍。

シャアアズナブル大佐は旗艦ザンジバルとムサイ3隻を率いてサイド6に向かっていった。

「我々はサイド6に先着しフラナガン機関のニュータイプと合流しルナツールを目指す」

「ニュータイプというのは戦力になるんですかいシャア大佐」

「なんだドレン大尉。貴様もニュータイプには懐疑的なものか。」

ララアスン少尉は今回が初めての実践だが、アムロレイ中尉は大尉も知っているだろう」

「そうでした。アムロレイ中尉がいましたね。自分には赤い彗星以上のパイロットがいるなんて信じられませんが」

「ハハハッ。お世辞を言うようになったのかドレン」

ドレン大尉は本心からそう思うのだ。

シャアアズナブルの副官として間近でその凄さを見ていたからには、それ以上のパイロットというのは実際にはいるんだろうが心の中では信じたくなかった。

『シャアアズナブル以上ということは化け物ではないか・・・いやエスパークか』

サイド6の港でアムロレイとララアスン、フラナガン博士がザンジバルに乗船した。

『ニュータイプとか言うが、ただの子供ではないか』

それがアムロとララアを最初に見たドレン大尉の感想だった。

「フラナガン機関はどうだった。アムロ中尉」

「僕は検査ぐらいしかしてないので何とも言えませんが・・・」

「シャア大佐。驚くべきはアムロ中尉のニュータイプ能力です。ララアスン少尉をわずかながら上回っております。長い間研究育成訓練をしてきたララア少尉を、ニュータイプとして何のトレーニングも受けていないアムロ中尉が上回るなんて機械の故障かと思いましたが笑いながらフラナガン博士が言う。

「それはすごい。ではエルメスはアムロ中尉が操縦するのか」

「いえ、エルメスはララア少尉に。幸いにもニュータイプ用ガンダムが手に入りましたからアムロ中尉にはそちらに乗っていただきたいと」

ジャブローだけでなく、これまで中立を守ってきたサイド6と月の都市もジオンに降伏していた。

連邦軍がサイド6で完成させたガンダムアレックスは無傷でジオン軍に引き渡された。

操縦し慣れたガンダムのほうが良いだろうということだ。

ザンジバルの中を案内され、自分の部屋で一人で荷物整理をしているとカイシデンが入ってきた。

「ようアムロ中尉」

「カイ中尉」

「全部アムロの言った通りになったな」

「そうでもないですよ。ルナツーが最後まで抵抗すると思いませんでした」

「結局のところ俺らはジオンの軍人になって戦争は終わる。お前そう言ったよな。それは間違っちゃいなかったわけだ」

「そのくらいは分かりましたよ。僕らを捕虜にしたままなんてあるわけないでしょ」

「ベルファストでお前に会ってなかったらと思うとゾツとするね。多分俺一人だったらベルファスト基地に戻ってジムで出撃して撃墜されてたさ」

「カイ中尉は何に乗るんです」

「ありがたいことに俺もゲルググもらったよ。寝返りもんだからリックドムぐらいかと思っただけどよかったぜ。この最後の戦いで活躍して戦争が終わったら除隊だな。アムロの方は大丈夫か」

「わかりませんね。戦争が終わった後は、もうどうなるか分かりません。それこそザビ家の人次第ですよ」

「結局ニュータイプだったのか?」

「なんかそうらしいですよ。脳波とかわけのわからん検査をされただけで実感がありませんけどね」

「それじゃあ簡単に軍を止めたりできないんじゃないか」

「それはしようがないですよ。アイルランドでジオンに入ってたな。小さなお島ですからね、ベルファストが落ちた後、落ち武者狩りで捕虜になったらもつと扱いはひどかったでしょうから後悔はしてませんよ」

「ミハル達にも恩賞が与えられたし、これが一番良かったんだな。後はルナ2で生き残るだけだな。しかし俺みたいなやつにも階級を上げてくれてありがたいよな。俺が中尉なんて柄かよ」

「そんなもんですよ。まだ戦いが残っている場合は投降者は優遇するもんですよ。そしたらまた投降する人が増えるでしょ。エルラン中

将なんか、エルラン大将ですよ」

「俺は頑張つて大尉を目指すね。そうすれば後々いい暮らしが出来るってモンよ。戦後の仕事が楽だったら軍に残るってのもありかもね。結構女性とかもいるんだよね。そういやアムロと一緒に来たララ少尉とかはどうなんよ」

「どうもこうもしませんよ。大事なニュータイプ候補生とか言つてろくに会話もさしてもらってないですからね」

「あらら、それは残念。まあ、ルナツーではあてにしているよアムロくん」

ルナツーのティアンム軍は数だけはジオン並に揃えてきた。しかしその8割はボールだった。

小細工なしで真つ向勝負をしかけてくるティアンム軍。

勝つことなど求めてなく自殺志願者のように突撃してくるジムとボール。

降伏するならとつくに降伏している。

絶対に引くことのないティアンム軍に対して、最後の最後の勝つて当たり前前の戦いで、死ぬなんて馬鹿なこととはしたくないと思つているジオン軍のパイロット達は少々苦戦をした。

しかし終わってみれば、たいしたことのない損害だった。ティアンムの乗艦が爆散して戦闘は終了した。

「なあにい！ けっこうな数のマゼランが逃げただとお！」

戦闘後、ドズル中将は吠えた。

「開戦と同時にアステロイドベルトにむかったそうです。ミノフスキー粒子をばらまいたので気づかなかったようです」

どうやらティアンムの突撃は撤退の時間稼ぎだった。

ルナツーにはジオンの下につきたくない人間が集結した。

下につくぐらいなら死んだほうがましだ！ と思う人は突撃して戦死。

生き残りたい人はアステロイドベルトに向かった。

こうして地球圏はジオンのものとなった。

クリスマスから年末年始まで戦争で活躍した者たちに長期休暇が与えられた。

アムロは地球に降りた。

0079、12月31日。

北米カリフォルニア基地の近くの仮設住宅群、その集会所でホワイトベースに乗っていた者たちが集まり開催した忘年会にアムロは参加した。

タムラ料理長が腕をふるって豪勢な料理がならんでいた。

「タムラ料理長、腕上げたねえ。ホワイトベースのときより全然うまいじゃん」

カイがおちゃらけていう。

「あのねえ。軍艦は予算が少ないから大変なの。腕は元からいいんです」

「そいえば、年、明けたら店だすんだってええ？」

「年明けたら捕虜の移動制限が解除されるっていうからね。出資してくれるひとがいたからね、ありがたいはなしさ」

「わたしも、その店で働かしてもらうのよ。ミハルもよ」

フラウが言う。ミハルはカリフォルニアに移っていた。

ガルマ准将は住民に優しく、カリフォルニアは大都市だからミハルと弟妹は幸せだった。

「え。そうかい」

「だって仕事してかないと食べていけないでしょ」

「でも本当にガルマ准将はすごいねえ」

ミハルが言う「ベルファストで基地近くまで行商してたけど、金はらわない軍人さんとかいたもん」

「そんなのいんだろね。カリフォルニアだったら懲罰もんだよ。なんであんないいひとなんだろね」

「坊やだからさ」カイがカツコつける。

「いい意味で御曹司なんだろうね。捕虜も虐待とか拷問とかなかったんだろ」アムロ。

「リード中尉とか正規の軍人はまだ収容所だけだね。あの人たち、厳しい取り調べされるまえにベラベラ全部しゃべっちゃうんだもん」

ハヤトが笑いながらいう。

「ハヤトは捕虜ではないんだろ」

「サイド7の民間人でやむを得ず戦ったものは民間人あつかいでいいってよ。子供だしね」

「すげえいいじゃんか。アムロと俺なんかサイド7襲撃まで遡って軍人あつかい。しかもジャブローで新兵訓練までさせられたからね」

「セイラさんもそうなの？」アムロ。

「セイラさんはホワイトベースが降伏したときに出て行って行方不明よ。元気でいてくれるといいんだけど」

「セイラは賢い子だから大丈夫よ」

ミライさんが励ますように言う。

「一年前に戦争が始まったのよね。激動の一年だったわね」

「僕たちにとってはサイド7からの衝撃でしたね」

「数か月前まで、戦争中とはいえ普通に暮らしてたのよね」

「ミライさんは年明けたらどうするんですか？」

「それなんだけどね、聞いてよねアムロ。ミライさんはフィアンセがいて、サイド6にこないかって誘われてるんだって」

フラウが興奮気味に言う。

「フィアンセといっても親同士で決めたことよ」

「だから凄いですよミライさん。相手は家柄とか関係なくミライさんを好きってことでしょ。サイド6にいくんでしょ」

「とりあえず1度は会うつもりよ。でも無理だったら戻ってきて、わたしもタムラ料理長のところで世話になろうかしら」

「ミライさんなら大歓迎ですよ」タムラ料理長。

「ハヤトはどうすんの？」

「ぼくはタムラ料理長のところで料理人になります」

「おまえ料理やんの？」

「こういう時は飲食とかが、くいっぱぐれなくていいんですよ」
「ちびちゃんたちは？」

仲良く遊んでる、カツ、レツ、キツカ、ジル、ミリー。

「あのこたちはフラウと私で面倒見るよ。施設にいれたらっていう人もいるけど、できれば一緒にいいよね」ミハルが言う。

「俺は、しばらく軍にいて金ためてから除隊だね。中尉だからけっこう給料いいのよ。しかも戦闘はもうないでしょ」

「カイさん、平和になったからいらなくなって放りだされるんじゃない？」

「ハヤトくん。俺はこうみえてもエースパイロットなのよ。大丈夫」

「え？エースってカイさんが？アムロじゃないの？」フラウ。

「あのねえ。撃墜数5でエースなの。俺は連邦でもジオンでもエースっていう珍しい存在なのよ」

「カイさん。ルナツーで5機も落としたの？すごいじゃん」

「全部ボールだけだね。作業用ポッドを戦闘用にしたりやつで足もないようなマシン」アムロ。

「あれでもモビルスーツなの！宇宙空間においては足なんて飾りなのよ。なんでそれが分かんないかねえ」

「なんかカイさんて運いいよね。ホワイトベースではガンキャノンでザク相手だし、ルナツーではゲルググでボール相手でしょ」

「運も実力だよハヤトくん」

「アムロはどうするの？」

「ぼくは軍に残るよ。それしか選択肢ないよ」

「そりやそうでしょ。アムロ大尉は連邦でもジオンでも撃墜王なんていう超絶スーパーエースだからね」

「やめてくださいよカイさん。ルナツーでは集まった敵をガンダムの性能で倒しただけですよ」

「たった一度の戦いで撃墜王とかなれるもんなの？」ハヤト。

「裏切り者を殺せて凄かったのよ。おれはゲルググだったけど、アムロはガンダムだからめだっちゃってねえ。しかもオデッサの砂煙みたいなのは無し。宇宙空間だからな。決死の覚悟の突撃でティアンム軍はアムロに殺到。いくらニュータイプ用ガンダムでも普通なら

死んでるよ」

「あれはラリア少尉がエルメスで援護してくれたんですよ。援護なければ厳しかったです」

夜になり帰る人もでてきたが、周りから離れて、ひとり夜空を見上げるアムロ。

そこにハヤトが近づいてきた。

「ちよつといいかいアムロ」

「なんだい」

「セイラさんとシャアのことだけど」

「ん？」

シャアとセイラ。アムロからしたらまったく関わりのないと思われる名前が同時に出てひっかかった。

「これは誰にもいってないんだけど、シャアとセイラさんは兄妹。しかも父親はジオンダイクン」

第12話

年末にシャアアズナブルはキシリアザビと会っていた。

「わざわざ年末休暇にすまん。休暇中でもなければドズル麾下のあなたには会いづらいのぞな」

「いえ、特に用事もないので」

「年末年始は妹と過ごすのではないのか？ キヤスバルレムダイクン」

しばしの沈黙の時間。

「いつかこのような時が来るとは思っていました、いざとなると怖いものです。手の震えが止まりません」

「ホワイトベースが降伏した時、逃げ出した兵士は何人かいるが、その中の一人がセイラマス。」

アルテイシアダイクンがマス家に養子に入りセイラとなった。

特に何をするわけでもないが、一応所在ぐらいは掴んでおかないとな。

それだけのことだった。

キシリア機関の力をもってすれば一人の娘の所在ぐらい簡単に割れる。

驚いたのはそのセイラマスのところ、足を運ぶシャアアズナブル「そういうことですか」

「これからのことについて話をしたいと思ったのだ。そなたにも妹にも危害を加えるつもりはない。もちろんザビ家の復讐などということを考えていなければということだがな」

「隠しても無駄だと思うので正直に言いますが、最初に士官学校に入った時は復讐心はありました」

「ほう」

「なんせ養父ジンバルに、父を暗殺したのはデギン公王やギレン総帥だと、子供の頃から教えられていましたから。一種の洗脳ですね」

「あの老人ならやりかねん」

「士官学校でガルマと友人になり、ドズル閣下の下で働いていれば復

「讐など意味がないと思いました」

「あの二人は暗殺なんてするような人間ではない。ガルマなんぞはジオンダイクンが亡くなった時にはまだ子供だよ。そして暗殺などせんのは私も同じだ。だがデギン公王やギレン総帥はどう思っている？」

「それは・・・暗殺などする方々ではないと思っております」

「今の状況ではそういうしかないであろうな。だがこれだけは覚えておいてほしい。私はギレン総帥を好かぬ」

「覚えておきます」

「復讐のため軍人になっておきながら、復讐心がない今、何を以て軍人をしている」

「父の目指したスペースノイドの独立のためです」

「それは達成されたわけだ。これからはどうする」

「いくら戦争に勝ったとはいえ。まだ連邦軍の残党などがいると思います。小規模の氾濫やテロなども起こるでしょう。スペースノイドの平和のため戦い続けるつもりです」

「ギレン総帥の下でスペースノイドが真に幸福な生活ができると思うか」

「ギレン総帥ならばやってみると」

「そういうしかないだろうな。年が明ければジオンの新体制が発表される。歴史上、統一王朝を樹立した政権が民衆にとって害悪ではないことはある。そういう時にシャアアズナブルを同志としたい」

「同志ですか・・・分かりました」

「皇帝だと・・・本気がギレン」

「地球圏のすべてを統治する国の君主ですよ。皇帝でも緩いぐらいです。新しい称号も検討させたいのですが、歴史あるもののほうがよろしいかと」

「ジオンダイクン亡き後の混乱を避けるため、一時的な方便として君

主制にした。それをジオン帝国だの皇帝だの」

「西暦時代は地球の一部地域だけを制覇して、天下統一などのたまひ。王だの皇帝だの言っていたわけですよ。それから比べればよっぽど正当性はあると思われまます」

「古代や中世ならともかく、革命が起こり市民の権利意識などが発達した近代以降では君主制なぞ続くわけがない。ナポレオンも失敗したのだぞ」

「人類史上初の偉業を成し遂げたのです。そのような昔の小者など話になりません」

「なりたければ、そなたがなればいい。私は退位して公王を譲ろう。その後で皇帝になれば良い」

「もう決まったことです。サインだけしてくれれば」

「私も年老いた。このような老後をおくることになろうとは、恥でしかない」

「父親ほど幸せな老後はありませんよ。全て私にお任せください」

「そうか、任せよう。しかしガルマのことだけは譲れんぞ。ガルマに何かあったら・・・」

「分かっております。可愛い弟です。国民の人気もある。粗末に扱うわけがないでしょう」

デギン公王はサインした。

宇宙世紀0080。

デギンザビは皇帝となった。国名はジオン帝国。

同時に大幅な減税が発表されたため大半の者は喜んだ。

連邦を倒し莫大な富をえて、しかも戦時中ほどの軍事費は必要ないため国庫は痛まない。

ギレンは宇宙移民計画を徹底的に進めた。

地球連邦の宇宙移民は中流や下流の人々を移民させ、金持ちや政府関係の特権階級は地球に居座りつづけたが、ギレンは、これを許さない。

地球の環境保護、資源採掘、軍関係者などの最低限の人員以外は全員コロニーに移住される。0086までに地球人口は約1000万ほどになった。

軍事ではアバオアクーはギレン総帥。

ソロモンはドズル大将。

グラナダはキシリア中將。

ルナツーはガルマ准將。

地球ではユーラシア・アフリカをキシリア。

オーストラリア・南北アメリカをガルマ。

連邦の残党や反乱など小規模な戦闘はあったが、おおきな戦闘はなく、0086が終わろうとしていた。

数年ぶりに日本でアムロは母親にあった。

「久しぶりに会いに来てくれたのは嬉しいけど、クリスマスを母親の所で過ごすなんて。誰かいい人いないの？」

「いないよ」

「やっぱり軍にいと出合いがないのかい」

「そういうわけでもないんだけど。一年戦争のころに比べたら女性は増えてるよ」

「そうかい」

「母さん。本当に宇宙には行かなくていいの」

「いいのよ。贅沢なことだけど、やっぱり人間は地球が一番だと思うわ」

「それはそうだろうけど、みんなが住むには地球は狭すぎる。人類が増えすぎたと言うべきかな」

ギレンの完全な宇宙移民計画が発表された後、似非環境活動家が大量発生した。

アムロの母、カマリアもその一人だ。

多くのエセ環境活動家はジオンには相手にされず宇宙に連れて行

かれたが、英雄アムロレイの母親は特別に認められた。

鳥取砂丘の砂漠化拡大を食い止める活動している。

そこまでして地球に住みたいものかとアムロは呆れていた。

「もうしばらく会えなくなるよ。年が明けたらアステロイドベルトに遠征に行くんだ」

この遠征は大々的に発表されたものであるから民間人の母親に話しても問題ない。

「あんな遠いところに・・・無事に帰ってくるんだよ」

12月30日の休暇終了までに知り合いのところをまわった。アステロイドベルトまで片道1年以上かかる。なるべく多くの人に会っておきたかった。

サイド6ではミライさんにあった。

カムランと結婚したミライさんには二人も子供がいた。

ハサウェイとチエーミン。元気な子供達だ。

元気と言ったらカツ、レツ、キツカも元気だ。子供というより少年少女になって生意気。

サイド7に住んでいる。もつともアムロたちがすんでたコロニーとは別のバンチだが。

「ハヤトから連絡はないかい」

「全くないわ」

「そうか。遠征に行く前に居場所がわかると良かったんだけど」

サイド7に移住してから同棲していたフラウボウとハヤトコバヤシだが、5年前からハヤトコバヤシは行方不明になっていた。

「私がいけないのよ。ハヤトを支えることができなかった」

「フラウは何も悪くないよ。自分を責めちゃだめだ」

その後、カイシデンの家に寄った。

1年前に除隊したカイシデンはミハルと結婚していた。

「アムロ、お前も早いとこ軍をやめたほうがよかったのに。もう1年除隊が遅れてたら俺もアステロイドベルト送りになるところだったな」

「軍がやめさせてくれるわけないでしょう」

「今もフラナガン機関にいつてるのか」

「大体一年の半分は実験とか訓練ですよ」

「なんか変な薬とか改造手術とかされてんじやねーのかよ」

「アニメじゃないんだから。そんなことするわけないでしょ」

「そりやそうだよな。前大戦の英雄にそんなことするわけねーよな」

「ハヤトのことなんだけど・・・」

「仕事の合間に探してるけど、全然手がかりないな。凄腕ジャーナリストの俺が見つけられないってことは相当厄介なところにいるぞ。もしかしたら裏社会とか、非合法組織に入ってるかも」

「テイターズとかですか。あれって地球至上主義者の組織でしょう。ハヤトってそんな思想ありました」

一年戦争後にテロ活動をしてる秘密組織だ。

「例えばの話さ」

サイド7の港で少年から声をかけられた。振り返って目が合った途端、ビリビリと眉間に衝撃を感じ、宇宙を感じた。

『この少年、ニュータイプだ』

「アムロレイさん、サインをお願いしますか」

「別にいいけど。ずっと待ってたのかい」

「このコロニーにアムロさんが来てるって話題になってたから、港で待ってたら会えるんじゃないかと。部活サボってやってきました」

「へえ。何の部活だい」

「空手部です。ジュニアモビルスーツもやっていて優勝したこともあるんですよ。将来はアムロさんみたいにパイロットになりたいです」

「それじゃあアステロイドベルト遠征から帰ったら、パイロットとし

てまた会えるといいな」

「そうですね。頑張ります」

「君の名前は」

「カミーユビダンです」

「頑張れよカミーユ」

12月31日。アムロはズムシティーの宮殿にまねかれた。

翌日、0087年1月1日。デギン皇帝が生前退位してギレン新皇帝が誕生する。

国の名前もかわりムンゾ帝国となる。

さらに即位式のあとはアステロイドベルトへの出陣。

その即位式に出席するためのだが、前日の夜の晩餐会が宮殿で行われた。

即位式にはジオンの有名人が呼ばれているが、独裁軍事政権ということもあり軍人がおかつた。

こういうのは苦手だ。

酒に酔った三連星が、

「アムロ！遠征では絶対に貴様にはまけんからな」

とかからまれたが、他は平和だった。

ひっきりなしに挨拶にくる相手に適当に愛想よくして晩餐会はおわった。

晩餐会終了後、キシリア閣下の部屋に呼ばれた。

シヤアアズナブルと同時に4年前にキシリア麾下に入った。

未だにアムロはキシリアが好きになれなかった。

キシリア軍の主な軍人たちのまえでキシリア本人が驚きの発表をした。

「明日。即位式あとの、アステロイドベルト出陣式でギレンを討つ」

第13話

カリフォルニアロール。カレーライスの軍艦巻き。

一年戦争が終了した後、ホワイトベースの料理長タムラがオープンさせた、寿司屋はそんなメニューが並んでいる。

そこで働くことにしたハヤトコバヤシは不満だらけだった。

宇宙世紀80年ともなれば純粋な種族など残ってはいない。

アムロやタムラ料理長は日系人ではあるが混血がかなり進んでいる。

ハヤトコバヤシは宇宙世紀では珍しい純粋たる日本人であった。

それに誇りもあり、パチモンみたいな寿司は大嫌いだった。

しかし食べていくためにはしょうがない。

我慢して働いていたが、麻婆豆腐の軍艦巻きが登場した時には呆れ果てて、やめることを決意した。

宇宙世紀0083。それなりに蓄えもできて、18歳になったハヤトコバヤシは独立することにした。

本格的な魚の切り身を乗せた握り寿司店をオープンさせたが、客足は鈍く、半年で閉店した。

純粋なスシなど誰も求めていないのだ。

「この店、カリフォルニアロールないの」

何度そんな言葉を投げかけられただろう。そのたんびにハヤトコバヤシの心は荒んでいった。

自分の店をオープンさせる時に、フラウボウがついてきてくれなかったことにショックだった。

結果としてはその選択は大正解だったわけだが。

店がうまくいけばプロポーズして結婚する予定だった。

何もかもが台無しだ。

いつしか戦争さえなければ。

そんなふう思うようになり、みんなの前から姿を消した。

その場しのぎの底辺の仕事を転々として裏社会に片足を突っ込んだりもした。

そんな彼に声をかけてきたのは秘密組織ティターンズだった。地球生まれの人間のみを集めた、地球史上主義者のテロ集団だ。別に彼らの主張に何の正当性も感じなかったが、ただ社会に不平不満を持っている連中との付き合いは心地よかった。

宇宙世紀0087。1月1日。

ハヤトコバヤシはサイド3ズムシテイの近くでダミー岩石の中に身を隠したモビルスーツに搭乗していた。

ハヤト以外にも他のデブリに10機のモビルスーツが隠れている。

1機をのぞいてすべてジムカスタム。

今となつては旧世代の遺物だ。

しかしたった1機は、最新鋭のガンダムタイプ。

ズムシテイの前ではドズル大将麾下の アステロイドベルト遠征軍、百数十隻の船が並んでいた。

新皇帝となつたギレンザビの遠征開始命令を待っているのだ。

ハヤトコバヤシ達の狙いは第一目標、ズムシテイの皇帝ギレンザビ。

第2目標は艦隊の中央に位置する遠征軍総大将ドズルと艦隊。

第3目標は艦隊の最後尾に位置する隠居したデギンとガルマザビ准将。

最も第1目標を達成できるかどうかでさえ危うい。自分が生き残る確率はゼロであろう。

あと少して自分が死ぬ。そういう時には過去を思い出してしまう。

ホワイトベースに乗った時、アムロたちに置いて行かれた時、色々な事を思い出した。

そして隊長機のジャマイカンのジムカスタムから突撃の号令。

ハヤトコバヤシは躊躇うことなく、ダミーの中から飛び出した。

ドズル艦隊左翼とズムシテイの間でダミーから飛び出したテロ部隊。

ズムシテイめがけて突っ込んでいく。

コロニーの前にはギレン親衛隊のグワジンが三隻。

次々とモビルスーツを発進させる。

現在の主力モビルスーツはエースパイロットにリックディアス、一般兵にはハイザック。

いずれもジオン系と連邦系の技術を合わせた高性能機。

ジムカスタムでは歯が立たないため、テロ部隊は撃破よりも時間稼ぎに全力を注いだ。

作戦の成功いかんは核バズーカ搭載型ガンダム、サイサリスにかかっている。

次々と撃ち落とされる仲間のジムを一切気にすることなく、ジェリドメサはサイサリスを突貫させる。

「なんだあのバカでかいモビルアーマーはー！」

巨大な緑色のモビルアーマーがサイサリスにせまってくる。

本当であればグワジンをこえたところでバズーカを打ちたかったのだが、巨大モビルアーマーが迫っているため、早めにズムシテイにむけてバズーカを発射した。

ただのバズーカ一発だと思っただろう、モビルアーマーもモビルスーツもグワジンも気にも留めなかった。

ズムシテイのコロニーには飛来する岩石やスペースデブリなどを撃ち落とすための迎撃システムがある。

バズーカー発など誰も気にも留めない。

じつさいに迎撃システムが作動してバズーカ弾を撃ち落とす。

だが、巨大な核爆発がズムシテイを吹き飛ばした。

サイサリスのバズーカは核弾頭だったのだ！

皇帝ギレンを始めコロニー内で生存者は0！

コロニー前面に展開していたグワジン二隻が巻き込まれて爆発。

腰に備え付けていた二発目の核弾頭をバズーカにセットしドズル艦隊に向かうジェリドメサ。

艦隊からは次々とモビルスーツが出撃していた。

できるだけ中央にいる総大将ドズルザビを巻き込む形で核爆発を起こしたいが、無理そうだった。

リックディアスのビームライフルが直撃する寸前、ジェリドメサは核バズーカを発射した。

ドズルの元には届かなかったが、核爆発は艦隊の左翼を薙ぎ払う。艦隊の1/3が消滅した。

あまりにも近くで爆発したためジェリドメサのサイサリスも巻き込まれた。

「ジオンのクソ野郎にデカいの喰らわせてやったぜ！ 青き清浄なる水の星のために！」

テイターンズのスローガンを叫び、満足してジェリドメサは死んでいった。

テロ部隊の最後の一機、ハヤトコバヤシの乗るジムカスタムが撃破されても、戦いは終わらなかった。

ギレン親衛隊の巨大モビルアーマー、ノイエジールのコクピット内で、ニュータイプ、シャリアブルは皇帝暗殺事件の黒幕を感じ取っていた。

フラナガン機関とは別のニュータイプ研究所によって強化されたシャリアブルの洞察力は、噂ではアムロレイを超えていると言われている。

その能力で事件の黒幕がキシリアザビだと分かったのだ。

「皇帝陛下の仇討ちである。黒幕はキシリアザビ！成敗する」

通信装置に叫びながらキシリアザビのグワジンめがけて突き進む。

ドズル配下の戦艦とモビルスーツは、あまりの事態にノイエジールに攻撃することができなかった。

アステロイドベルト遠征に参加しないため、最後列に位置していたキシリアザビ。

「ノイエジール？ どういうことだ？」

「ニュータイプの勘だと思われます」隣のグワジンを指揮するシャアとの通信。

「落とせるかシャア大佐」

「たかが一機のモビルアーマー。大したことありません」

「そうか頼んだぞ。一応念のためにうちの船からもモビルスーツを出す」

即位式と遠征の出陣式にキシリアザビは二隻のグワジンしか連れてきていない。

一隻は自分の乗るグワジン、黒い三連星やジョニーライデンが乗っている。

もう一隻はシャアアズナブルの指揮するグワジン、アムロレイやラアスンが乗っている。

こちらはアステロイドベルト遠征に参加の艦だ。

ガルマザビが6隻のグワジンを連れてきていることを考えると2隻は少ない。

これはギレンザビを警戒させないためである。

ドズルから戦闘を止めるように通信が入ってきたが怒鳴り返す。「仕掛けているのは向こうの方だ。向こうに止めさせる！」

最初にノイエジールに攻撃を仕掛けたのはラアスン中尉のガンダム、フルバーニアン率いるリックディアス6機の部隊。

これは最初は互角の戦いだったが、すぐに均衡は崩れた。

シャリアブルの呼びかけで核爆発から残ったギレン親衛隊グワジン、最後の一隻のモビルスーツ部隊が参戦したのだ。

リックディアス2機、ハイザック7機。

モビルスーツデッキでは、さらに2機の新型モビルスーツが発進準備に入っていた。

「そらが・・・宇宙がおちて・・・」

「ロザミー、大丈夫」

「大丈夫なものか！この不愉快さ」

「それはキシリアから来るものだ。シャリアブル大尉が言っている」
「なら、アレを落とす」

「そうだロザミー。良い子だ」

研究者に言われ発進するロザミアバダム少尉。

「フオウ、あなたもいきなさい。記憶を取り戻したいのでしよう」
「わかった」

こちらも研究者に言われて発進するフオウムラサメ少尉。

モビルスーツデッキに艦長から通信が入る。

「強化人間は使い物になるのか？」

「パイロットも機体もテスト中ですから分かりません。でも出すしかないでしょう」

ジョニーライデンと黒い三連星のリックディアスが混戦に飛び込んでいく。

キシリアのグワジンで他のモビルスーツ10機は防衛のため艦の前で待機。

最後に参戦しようとしたのはアムロレイの超巨大ガンダム、デンドロビウム。

年末休暇の前にはアムロレイがデンドロビウムのパイロットになることは知らされていた。

一年戦争の時なら、自分の新しい機体に少しでも早く習熟しようとしていただろう。

しかしアステロイドベルト、片道1年以上の先にいる敵と戦うと思っていたアムロは対応が遅れた。

今回の出陣式によるゴタゴタだって、アムロレイは昨日の夜に聞かされたのである。

「テイターンズがテロを起こそうとしている情報をキャッチしたの
で、それを見逃しギレンザビを殺害してもらおうということですか」
昨夜アムロはキシリアに確認した。

キシリア本人、アムロ、シャア、ララア、黒い三連星がいた。

「そういうことだ。ここにいるもの以外で知っているのは、グラナダの留守を任せているマクベ。モビルスーツを提供してもらっているアナハイムのトップ。そしてデギン前皇帝。ギレンさえ討てば後は前皇帝陛下が収めてくださる」

「そんなに上手くいくもんでしょうか」

「私の後をガルマに譲ると言ったら認めてくれたよ。父上が ドズルもガルマも抑えてくれるだろう。もしも無理なら分割統治で妥協するでもある。どう転んでも今のギレン独裁よりはましだ」

戦場では予測しないことが起こるとは言え、こんなことになるとはアムロレイには想像もつかなかった。

ノイエジールは相当手強いと思う。

あの混乱の中で黒幕がキシリアザビだと気付いたのは、相当なニュータイプ能力の持ち主だとみた。

さらに具合の悪いことにアムロの調子は万全ではなかった。

成長しすぎたニュータイプ能力はテロ部隊の最後のジムカスタムが爆発した時、パイロットがハヤトコバヤシだということに気づかせた。

『アムロ、すまない。俺はバカだったよ』

宇宙を半透明の裸で漂うハヤトがアムロに話しかける。

「本当に馬鹿さ。バカだよハヤト。フラウボウに何て言えばいいんだ」

『フラウボウのこと頼んだぞ』

「勝手なこと言うなよ」

『そうだよな。 勝手なこと言ってごめん。でもホワイトベースでもアムロレイに任せておけば大丈夫ってみんな思ってたのさ』

「大丈夫なものか」

アムロは涙を流した。薄れてゆく声でハヤトは言った。

『前に言ったことを覚えているな。シャアアズナブルには気をつけ

ろ』

そしてハヤトは消えていった。

デンドロビウムは中心にステイメンと呼ばれるモビルスーツが配置されている。

それにオーキスと呼ばれる武装システムが付け加えられた、複雑な火器管制システムを搭載した、モビルスーツとモビルアーマーの合体的マシンである。

そのため準備に手間取り発進が遅れた。

「アムロはノイエジールをやってくれ。他はこちらで引き受ける」
発進してすぐシャアアズナブルの指示に従い ノイエジールに仕掛ける。

「アムロてめえ、デカくて目立つやつを横取りしようつてののか？」

黒い三連星が絡んでくるが、

「モビルスーツの指揮はシャア大佐に任せてある。従え！」

キシリアザビの通信により悔しそうな表情を浮かべながらも我慢する三連星。

巨大兵器同士決着をつけるべきと思ったのかノイエジールもデンドロビウムに攻撃を仕掛けてくる。

アムロレイは、自分に注意を向けさせ徐々に混戦状態からノイエジールを引き剥がす。

「大佐。エルメスのビットと同じサイコミユ兵器です」

ギレン親衛隊の白いモビルスーツが、背中からビットらしきものを展開してるのをみて、驚くララア。

「厄介だな。しかも2体もいる。ララア、1体を引き受けてもらえるか。もう1体は私がやる」

「危険です大佐」

「しかしやるしかないだろう。イチカバチカ接近戦を仕掛けるしかない

い」

エルメスのビットみたい多数の無線ビーム砲を相手にする場合、一つ一つ撃ち落としていくか、接近して相手の本体に近づくことでオールレンジ攻撃を打ちにくくさせる。それぐらいしか対処方法はない。

「おい！ジョニーライデンがやられたぞ」

「シャアアズナブル何とかしろ」

「あつちこつちから打ってくるぞ」

黒い三連星が喚き散らす。

「とにかくやるしかない。私とララア中尉が接近戦を仕掛ける。黒い三連星と他のモビルスーツはビットを攻撃しろ。敵の他のモビルスーツにも注意しろよ」

ララアスのフルバーニアンは武装はビームライフルとビームサーベル、バルカンとオーソドックスだが、機動力は半端ない。その機動力を活かしてキュベレイにまわりつくことができた。

しかしシャアアズナブルのリックディアスでは苦戦した。

モビルスーツ部隊の苦戦を知ったアムロレイは、早めに仕掛けることにした。

それまで射撃と回避しかしてこなかったノイエジールとデンドロビウム。

アムロはメガビームを一発打ち、回避したノイエジールにマイクロミサイル108発をばらまく。

標準サイズのモビルスーツに乗っていたらシャリアブルは余裕でかわしただろう。

しかし巨大モビルアーマーでは全部はかわせず、いくらかをもらってしまふ。

マイクロミサイルではそこまでのダメージにはならないのだが、その際にデンドロビウムが直進する。

『なんだこれは。スキだらけ。あたりに来てるようなものじゃない

か』

シヤリアブルは不思議に思った。撃墜王アムロレイにしてはあまりにも無雑作に過ぎる。

メガ粒子砲をデンドロビウムめがけて打ち込む。

メガ粒子砲が向かってくるのを気にも留めずに直進するアムロレイ。

ビームが当たる直前、アイフィールド装置が作動しバリアーによってビームを消滅させる。

大型ビームサーベルを引き抜き切りつける。

かわして距離を取るノイエジールに対して回避できないタイミングでメガビームを打ち込むが、これも I フィールドバリアーに弾かれる。

お互いに アイフィールドバリアーを確認したニュータイプ2人は、このままでは戦いが長引くことを悟った。

第14話

超巨大企業アナハイムエレクトロニクスのトップは、会長メラニーヒューカーバインだと一般的には思われているが、実際にはビスト財団のサイアムビストが仕切っている。

地球連邦政府との結びつきによって世界最大の企業になったアナハイム。

しかし一年戦争にジオンが勝利したことにより会社は傾いた。

ジオンと連邦の戦いが膠着状態に陥ってから、長寿を維持するため冷凍睡眠に入ったサイアムビスト。

次に目を覚ました時にはオデッサの戦いが終わっていた。

モビルスーツが量産されれば連邦の勝ちだと思っていた目論見が外れた。

アナハイムエレクトロニクスの資本の大半は月にある。

そのため月の専制君主とまでよばれた。

すぐさま中立をしていた月都市群をジオンに組み込んだが遅かった。

あの時は誰もがジオンの勝利を確信していたため、ギレンザビからは何の感謝も得られなかった。

ジオニツク社、ツイマツド社、MIP社が存在しているジオンからしてみたら、アナハイムエレクトロニクスは相手にされなかった。

月のグラナダを本拠地にするキシリアザビからのルートで、アナハイムの幹部を送り続けたが、十数回目にギレンザビに完全に拒絶された。

この十数回の交渉に、仲介してくれたキシリアザビは毎回好意的であつた。

そのためアナハイムエレクトロニクスはキシリアザビと結んだ。

長い年月をかけてジオン系のモビルスーツ技術を学び、最新のガンダムを3体作るまでに至った。

最初っから完全に技術提供されていれば数年で作れたであろうガ

ンダムに6年もの時間がかかってしまった。

キシリアザビからギレンザビ暗殺計画を知らされたメラニーヒューカーバインはすぐに即決した。

成り上がるために一時期裏社会にいたサイアムビストにとっては、秘密テロ組織テイターズと結びつくことなどどうさもなかった。

核搭載型ガンダムサイサリスをテイターズに流し、フルバーニアとデンドロビウムをキシリアに渡した。

「今度こそアナハイムエレクトロニクスが頂点に返り咲く時です」

メラニーヒューカーバインは自信満々にサイアムビストに告げた。

「二応、念のために第二の策も考えてある。今度こそ絶対に大丈夫であろう」

サイアムビストは満足げに頷いた。

キシリアザビはイライラしていた。

「デンドロビウムの動きが悪いようだが？」

「いかにアムロレイとはいえ急な実戦では実力の全ては発揮できないのでは」

副官のトワニングが答える。

「それをやってみせるのがニュータイプだろう」

「しかし敵もまたニュータイプであります」

「あの、サイコミュ搭載している白いモビルスーツもニュータイプか？」

「多分そうでしょう」

「ギレンにはやられたな」

一年戦争の時、キシリアがフラナガン機関とニュータイプ部隊を任された。

強力なニュータイプ部隊に執着することのないギレンザビを不思議に思ったものだ。

その答えが明らかになった。

『フラナガン機関とは別に極秘のニュータイプ研究をしていたみたい

だ
』

もはや完全にキシリアの部隊が不利になっていた。
ここでキシリアはミスを犯してしまう。
近くのデギンザビに協力を仰いだのだ。

キシリアから援護の要請が来たことを知ったデギンザビは、
『相当追い込まれているな。ならば普通に手助けするよりも・・・』
オープン回線によりデギンザビの声が拡散された。

「ギレンを打つたのはキシリアである。全軍、キシリアを撃て」
さらに続けて、

「ギレン亡き後、この国のトップは私である。ジオンの全兵士は
命令に従え。キシリアを討つのだ」

デギンザビの計画では本来であれば、キシリアにトップを取らせ、
その次にガルマに継承させていくはずだった。

しかし弱っているキシリアを見て、今すぐ倒すべきだと考えた。
ギレンも危険だがキシリアも危険なのだ。

キシリアの危険の方が小さいため今回は協力するつもりだったが、
やめた。

「父上、何の確証もなく無茶です」

ガルマが抗議するが取り合う気はなかった。

敵もしくは、将来敵になる存在は倒せるうちに倒しておくべきだ。
証拠だなんだと、手順だなんだと口を揃えては手遅れになるのだ。
先んずれば人を制し遅れば人に制される。

ジオンダイクンとともに地球連邦に対して争ってきたデギンザビ。
ジオンダイクン亡き後、公王にまで上り詰めた権謀術数のかたまり。
り。

その凄みの全てがデギンザビから放たれていた。
それでも躊躇するガルマザビと違ってドズルザビは配下に命令し
た。

「デギン陛下のご命令である。キシリアを撃て」

四面楚歌状態でシャアアズナブルの動きは素早かった。

「デギン陛下に従え！交戦するな！」

シャアアズナブル隊のグワジン艦長ドレンと配下のモビルスーツ隊に、攻撃を控えズムシテイの残骸に潜り込むよう指示を出す。

デギンザビとガルマザビの乗るグワジンに近づき通信する。

「シャアアズナブル隊は陛下に従います。我が部隊は皇帝暗殺とは無関係です」

「父上、シャアは信頼できます」

ガルマザビの助言もあり、デギンザビはシャアアズナブル隊を敵から除外した。

シャリアブルをはじめとするギレン親衛隊は逃げていくアムロたちを追わずに、キシリアの旗艦パープルウィンドウに殺到し撃破した。

ズムシテイの陰に入り生き延びることができたモビルスーツ隊は、アムロレイ、ララスン、アポリー、ロベルト、黒い三連星。

たったの7名だった。

そしてドレン艦長のグワジン。

ギレン暗殺後の新体制。

デギンザビが皇帝に返り咲き。国の名はジオン帝国に戻る。

デギンザビは隠居のために作られたルナツターの宮殿に住む。

今までと同じく、ルナツター方面軍の指揮はガルマザビ。ソロモンも同じくドズルザビ。

アバオアクーはギレン親衛隊のエギーユデラーズ。

グラナダはシャアアズナブルが指揮することになった。

これが一時的な仮の新体制である。

そしてこの新体制はすぐに崩壊した。

デギン皇帝がルナツの宮殿に到着した頃、アバオアクーから全世界に向けて放送が流された。

そこに写っていたのは金髪はまだ若い青年だった。

グレミートト。

グレミーはギレンの隠し子であることを DNA 鑑定の結果を含め公表した。

そしてジオン帝国に対し独立宣言。

エギーユデラーズも生前ギレン陛下から、自分亡き後はグレミーに後を継がせるよう指示されていたと発表。

デギン皇帝は持っていた杖を叩きつけて怒りをあらわにしたという。

即刻グレミーを討伐すべし！

しかしそれはできなかつた。

グラナダから全世界へ向けて、シャアアズナブルの放送。

「私はシャアアズナブル大佐であります。

もう一つ知っておいてもらいたいことがあります。

私はかつてキャスバルレムダイクンという名で呼ばれたこともある男だ。

私はこの場を借りて、ジオンダイクンの遺志を継ぐ者として語りたい。

ジオンダイクンの遺志はギレンザビのように欲望に根ざしたものではない。

地球に魂を引かれた人々、地球連邦を倒したまでは良い。

地球に住む人々を宇宙に移民させるのも良い。

しかしその結果は一部の者たちによる独裁政治である。

同じスペースノイドであるにも関わらず、サイド3の人々のみを優遇し、他のサイドを差別する。

元からその意識はギレンザビにはあつた。

だからこそコロニーに毒ガスをまき、コロニー落としなどというこ

とを実行できたのだ。

全てのスペースノイドが平等に自由に平和に暮らす世の中を作る。その世界は全てのスペースノイドの投票により指導者を決める共和国となるであろう。

私が指導者となるのは一時的なものである」

キヤスバルレムダイクンはネオジオン共和国の独立を宣言した。

キシリアザビが駄目だった時、シャアアズナブルに任せる。

これがサイアムビストの第二の策であった。

アムロレイは憂鬱にため息をついた。

『今度の戦争は一年戦争よりも長くなりそうだな』

一対一ではなく三つの勢力が争うため、そう簡単には終わりそうにない。

さらに厄介なことに、アステロイドベルトのアクシズが地球に向けて動き出したという情報が入った。

第15話

三つ巴の状況になってから、すでに半年が過ぎようとしていた。最初の頃に南極条約を守ることを、最初にキヤスバルが提案し宣言した。

それをうけて、グレミーとデギンも宣言したぐらい。

ほかの軍事的な動きは無し。

一年戦争時の南極条約に追加する形になったのは、

コロニーを攻撃しない。

コロニーを軍事利用しない。

地球へ侵攻しない。というものだ。

人類の99%以上が宇宙居住者となったからにはコロニーへの攻撃など世論が許さない。

ズムシテイーの悲劇でコロニー居住者は恐怖していた部分があったので、これは歓迎された。

コロニーの軍事利用禁止はコロニー落としだけでなく、一年戦争でジオンが計画していたコロニーレーザーも禁止である。

これによりコロニーを武力占領できなくなり、要塞をめぐる戦いとなった。

しかし要塞を落とそうとすれば莫大な戦力が必要になってくる。

三つ巴だから、うかつに攻撃できない。

量的に一番戦力があるのはソロモンとルナ2をようするデギン。

逆に一番少ないのはグラナダのキヤスバル。

しかしデギンがグラナダを攻撃すると、グレミーに漁夫の利を与えるだけなのだ。

このことから各勢力は、うかつに大規模な軍事行動をさけて小競り合い。

一年戦争後は軍縮の流れだったのだが、現在は軍備拡張競争をつづけていた。

ジオン帝国は自軍での独自の新型モビルスーツの開発。

グレミー軍はキュベレイの量産化。

ネオジオンはニュータイプ専用モビルスーツ開発。

転機がおとずれたのは、半年後。

大型木星輸送船ジュピトリスが地球圏に帰還したのだ。

地球のアマゾン奥地にある秘境の地下シエルターでティターンズ総帥ジャミトフハイマンとバスクオムは会話をしていた。

「やはりゼータは、やるのですか？ ジャミトフ総帥」

強面で恐れられている、バスクオムでも躊躇することがあるのだと、ジャミトフは内心おかしく思った。

「当たり前だろう。オペレーションゼータ。そのためにもどれだけの資金と人手と時間を費やしてきたか」

「しかしあれを行うと・・・最悪、億単位の死人が出ます。もしかするとジオンの行った一週間戦争を超えるも・・・」

一年戦争の最初の一週間で数十億の人間が、ジオン軍のコロニーへの攻撃で亡くなった。

ジャブローより地下深くの地下シエルターにこもってる自分たちには影響はないだろうが、バスクオムは慄然とせざるを得ない。

スペースノイドの中には、ティターンズの考えに共鳴している同志や、同志予備軍もいるのだ。

「もはや軍備を整えて武装蜂起などしていられる状況ではない。使えるものは何でも使う」

「人類史上最悪の汚名を被ることになるでしょう」

「覚悟の上だ。青き清浄なる水の星、母なる地球に、なぜ地球人が住んではならん！ 地球の環境汚染はだいぶ改善されている。今なら10億人ぐらいは地球を汚さずに居住することは可能だ」

「もちろん、おっしゃる通りです。しかし地球上にも影響があるかも」「ごくごく僅かの可能性ではあるが、可能性はなきにしもあらず。しかしそれでも我々には絶対に影響はない。このシエルターは我々が100年をもつだけの物資が蓄えられている」

「その通りです」

「そうだろう。ジャマイカも立派にやり遂げた。凡愚の者共は凶悪テロリストなどと言っているそうだが、彼こそこの聖戦の英雄なのだ。彼に続け」

「わかりました。サイド7にオペレーションゼータ開始の指示を送ります」

「うむ」

コロニー居住者の地獄を想像して邪悪な笑みを浮かべるジャミトフハイマン。

宇宙世紀になってもブラック企業は健在であった。

地球ではタダだった空気ですら人工的に作り出すコロニーでは金を稼ぐというのは根源的なものだ。

もちろん労働者を守る法律はあるのでブラック企業イコール違法組織という事になる。

「違法ブラック企業を利用するとはね。気は進まないな」

「アムロ少佐、そんな企業体質だからこそ、コロニー潜入なんて利敵行為に協力してくれるんでしょ」アムロの部下、アポリーが答える。

「それはそうだが、けっこうな額を払ってしまっただろ。ブラック企業に金が流れるのはよくないな。それで、どんな悪徳経営してるんだ」

「義務教育の少年とかを働かせてるみたいですよ」

「それはひどいな」

「戦争から、大人は数へってますからね。給料あげりやいいんでしようが、ブラック経営者は人件費あげるの嫌がりますから。安い給料で働く少年を使うと」

「学校にもいかずにたいへんだな」

「けどアムロ少佐のばあいは、労働どころかモビルスーツ戦闘でしょ。普通ならとつくに死んでますよ。しかも最初の敵部隊は赤い彗星」

たしかにアムロはハイスクールにもいかず、ずっとモビルスーツに

のってきた。

だが、だからこそ少年は学校に行くべきだと思う。学校は嫌いなほうだったが、行けなくなると大切な事だったと解る。

「ガンダムで性能で生き残れただけさ」

「いやいや、少佐がニュータイプだからですよ」

「アポリー中尉、やめてくれよ」

食堂での話をきりあげてアムロは自室にもどった。

最新鋭戦艦アーガマは回転式重力ブロックがあり、居住スペースが快適なため長期の航行でも乗組員の心理的負担は少ない。

グラナダからサイド7まで快適にすごせた。

ジオン帝国のサイド7で行われている、新型ガンダム開発計画の調査がアムロの任務だ。

三つ巴戦争が膠着状態になってからの半年間は、アムロは専用モビルスーツ開発にかかりきりだった。

アナハイムエレクトロニクスの新ガンダム開発スタッフ達は若い美女ばかりだった。

『まさか顔で採用しているのか』

デンドロビウム開発の実績がなければ、アムロレイには到底信じられなかっただろう。

その華やいだスタッフにアムロは戸惑った。口調からして軍人ではない。アナハイム社員のスタッフは気安くはなしかけてくる。

全員アムロよりも年上なのだからしょうがない。

「二年戦争末期にジオンはモビルアーマー開発に力を入れましたが、これは正しいと思うのよ。」

オデッサ以降にジオン軍が優勢になりすぎたために、実戦での成果は上がってないけどね。

宇宙戦だけに限って言えばモビルアーマーは極めて有効よ」

「では俺の専用機はモビルアーマーということか？ エルメスみたいな？」

「いいえ、そうじゃないの。あくまで少佐にはモビルスーツに乗ってもらいますよ。アムロレイにはモビルスーツがお似合いでしょ。モビルスーツにモビルアーマーへの変形機構を搭載したいと思ってるの」

最初に会った時、アナハイム側のメインスタッフ、ニナパープルトンは自信をみなぎらせて言ったものだ。

アムロレイ専用ニュータイプ用モビルスーツ開発は、アナハイムエレクトロニクスとフラナガン機関の共同で行われている。

戦争が膠着状態に陥ってから半年間は、アムロレイはこれに専念していたのだ。

そして半年かけて出来上がったのは黄金のモビルスーツ百式。

だが、リックディアスを上回る性能を持つ百式でさえ、副産物に過ぎない。

アムロレイがサイド7に向かっていている間も百式に変形機構を搭載した『デルタガンダム』の開発が続けられているはずだ。

ジュピトリス接近。

これに対してのキャスバルの戦略は。

ジュピトリスとの交渉にはマクベ。

新型ガンダムを開発しているサイド7にはアムロ率いるアーガマ隊。

そして自らはデギンとの同盟を結ぶためルナ2とグラナダの中間ポイントへ。

「ララアには私と一緒にきてほしい」

自宅でララアと二人で話すキャスバル。

「かまいませんが、戦力を分散させすぎでは?」

「どれもうまくいかなくてもいいんだ。とくにジュピトリスは無視でもよかったぐらいだ」

「それではマクベ准将が可哀想」

「マクベはグラナダの留守にするわけにはいかんから、いつてもらう

だけさ」

「アムロ少佐は？」

「理想は新ガンダム奪取だが、無理をするなど言っている。技術者の亡命のみでも十分だ」

「それなら本命はジオン帝国との同盟で？」

「いや、それは解らない」

「どういうこと？」

「デギンザビ次第さ。それを見極めるためにも直接会わねばならん」

グラナダを出発するにあたり、ラファには百式がまわされた。

ジウドーアーシタはコロニー外での作業に使うモビルワーカーに乗る瞬間、宇宙を感じた。

『なんだこの感覚は？』

「おい！どうした？ジウドー、ぼーっとしてんじやねーぞ」

同じくジャンク屋の仕事をしている仲間の、ビーチャオーレグが声をかけてきた。

「いや何でもないよ」

「そうかよ。なら今日もいっちょ稼ぎますか。今日は負けねえぞ」

ラグランジュポイントとは太陽と月と地球の重力の中間地点である。

ここにコロニーが作られている。コロニーの集まりをサイドという。

サイド7はルナ2と同じラグランジュポイントにあるため、一年戦争末期のルナツー攻防戦の残骸などが、かなりある。

ジャンク屋はこれを回収して生計を立てている。

ジュニアハイスクールを卒業していないジウドーアーシタたちは本来なら働けないが、ブラック企業ジャンク屋のゲモンバジャックにとっては、学生なんていうのは低賃金で雇える格好のカモなのだ。

ゲモンバジャックのジャンク屋で一番の稼ぎ頭はジウドーアーシタだ。

妙に勘が働き、度々大物を回収している。月給で普通の会社員と同額を稼いでいる。

ビーチャオーレグなどは羨ましがって、何かと張り合ってくるのだ。

ジュードアーシタからしてみれば羨ましがられる存在ではないと思う。

なぜなら、まっとうなジャンク屋に行けば、ジュードアーシタほどの働きがあれば会社員の3倍は稼げるはずだ。

最もまっとうなジャンク屋は義務教育を終えていない学生は雇わない。

ぼったくられているのだ。どんなに待遇が悪くても転職はできない。

『サイド7の新しいコロニーは綺麗でいいんだけどな。カネがかかりすぎる』

ジュードアーシタ一家が元々住んでいたコロニーは、サイド1の1バンチ、シャングリラ。

古いタイプのコロニーでボロかったが居住費が安かった。

ギレンザビが地球圏を統一し、地球の人々を宇宙移民させることになった。

しかし昔からの古いコロニーに住む民衆の主張は、

『なぜ地球に残ったずるいやつらのために新しいコロニーを提供するのだ。宇宙移民の初期の頃から、コロニーに住んでいる俺たちにこそ、新品のコロニーに住む権利がある』

確かにそれはもつともなことである。

そして古いタイプのコロニーから、新しいコロニーへの移民も開始された。

こうしてジュードアーシタはサイド1からサイド7にやってきたのだ。

母親は既に亡くなっており、父親は出稼ぎに行っているが、あまり稼ぎは良くない。

妹のリーナを養うためだけでなく、いい学校に入れるためには金が

かかるのだ。

「今日は長時間作業できないからな、ちやつちやと稼ぐぞ」

「そうだな。ゲモンのやつが訳ありの仕事をするらしいからな。勘弁してくれよ」

最近、自作モバイルスーツ『ゲゼ』にかかりきりのゲモンは、いつもは作業は子供に任せている。

だが、たまに自らコロニー外の作業に出る。その時はジュードー達は帰らされるのだ。

あれは絶対に密輸なんかやばいことやってるぞ。ジュードー達はいつもそう噂していた。

「どうせなら俺たちにやらしてもらえないかねえ。もちろん大金もらうぜ。何とかして稼げてえ」

「ビーチャ。それでもしテロリストとかだったらどうなるんだよ」
「テイターズだとか?」

「そいつはごめんだね。さすがにテロの片棒は嫌だね。薬ぐらいだったら喜んでやるけどね」

「それは確かにね。見つかったって少年法があるからね。やるなら今のうちってね」

「大金稼げるって言ったら? もしかしたら良い仕事あるかもよ」

「なんだ、教えてくれよ」

「まだ確かな話じゃないんだ」

「いいから教えてよ」

「みんなが集まったところで言うよ。とても二人だけでできる仕事じゃない」

「それじゃあ作業が終わったら。どっか飯でも食いながら説明してくれよ」

「いいぜ。ファーストフード店でどうだ」

「オーケー」

数時間後、和風ファーストフード店タムラの奥の席で、ビーチャから少年たちに打ち明けられた計画は、軍の基地から新型モバイルスーツ、ガンダムを盗み出すというものだった。

和風ファーストフード店『タムラ』でエビ天ぷら巻き寿司をパクつきながら、カミーユビダンとファユイリイは会話していた。

「私あんまり好きじゃないわ、この味」

「俺はうまいと思うよ。アムロさんもこういうの食ってたんだろうか」

「アムロ　って？ 撃墜王のこと？　なんでここで撃墜王が出てくるの」

「フアはこの店知らないの」

「なんかめっちゃくちや流行ってるチェーン店なんでしょ」

「高級料理からファーストフード、弁当屋まで、色々なジャパニーズフードを扱う飲食チェーン企業、和風タムラ。経営者はサイド7の高額所得者番付7位だってよ」

「そんなにすごいんだ」

「サイド7に店舗数100超えてるよ。タムラ社長は一年戦争でホワイトベースの料理長やってたそうだよ」

「それが？」

「鈍いなあ。ホワイトベースはアムロレイが乗っていた地球連邦の船だよ」

「そっか。それでか。アムロレイもこういうの食べてたのかな」

「知らないよ」

土曜日の　午後2時過ぎ。店内には人影はまばらだった。

新しくオープンしてからすぐだと、たくさんの人がいて苦手だから、カミーユビダンは2週間待った。しかも混雑の時間帯を避けてきたのだ。

一人で食べるつもりだったが、隣に住むフアに見つかってしまったのだ。

両親が留守にすることも多いカミーユのことを心配して、家族ぐるみで世話を焼いてくれる。

ありがたいと言えばありがたいが、思春期の少年にとってはありが

た迷惑でもある。

「カミーユ。また爪噛んでる。そのクセ止めなさいよ」

「うるさいなあ。俺がカミーユってのがばれちゃうだろう」

「呆れた。みんな知ってるわよ。それより晩御飯はどうするの」

「ここはテイクアウトもできるから。今日も両親は仕事だから、ここで買って帰ろうかなと」

「うちで食べればいいじゃない。今日は確かシチューだったはず」

ユイリイ家のシチューは大変美味である。

気楽に一人でテイクアウトを食べるのもいいが、行ってみるとするか。

「そうしようかな。それにしても呑気だよな。俺もそうなんだけど。

一応戦時中だよ」

「だって半年も何も無いんだもん」

「今ないからといって今後も何も無いとは限らない」

「たとえあったとしても軍人だけのものでしょう。コロニーには危害を加えないと言ってたし」

「わかるもんか。ジオンなんて毒ガス攻撃や、コロニー落としをやってたような国だぞ。三つ巴で手出しできないから平和にみえるだけさ。実際に軍事拡大の一方だからね」

「カミーユの両親も軍の関係者だったよね。それで忙しいのか」

「どうだろうね」

カミーユが思うに、母親は完全に仕事一筋。

しかし父親は愛人がいるみたいだ。

元々母親は仕事一筋ではなかった。仕事と家庭を両立していた。仕事一筋になったのは父親の愛人関係に気づいているからだと思う。

「膠着状態が終わるのは案外近いかもね。木星から輸送船ジュピトリスが帰還したみたいだし」

「え？ 何で輸送船が一隻戻ってきただけで戦局が変化するの？ アクシズが地球圏にきたとかならわかるけど」

「あのねえ、ジュピトリスと言ったら全長2km、移動基地とか移動

都市とか言われるぐらいの規模なんだ」

「そんなにすごいの」

「当たり前だろ。木星まで行くんだぜ。モビルスーツとかだつて多数搭載してあるし、モビルスーツ生産もできるらしい。南極条約で木星輸送船団には手を出さないということになっているから、地球連邦の残党であるアクシズも攻撃はしないとは思うけど」

「どの勢力に着くんだらうね」

「それは分からないけど。どこについたとしてもパワーバランスが崩れる」

「そして戦争が激化する。つて言いたいわけね。確かカミーユはネオジオン共和国を指示してたんじゃないよ」

「それはそうでしょう。ザビ家の独裁なんて意味がないよ」

「そらそうよね。選挙で決めるのが一番だよ。でも選挙による民主主義の行き着いた先が地球連邦政府のわけでしょう。ちよつと心配じゃない」

キヤスバルダイクンは戦争終結後は選挙によって指導者を決めると宣言している。

「そんなことないよ。地球連邦政府はスペースノイドとアースノイドの対立があつたからね。今は人類のほとんどがスペースノイドになつているから心配ないよ」

それからもとりのめのない話をして、巻き寿司を全部食べ終わった瞬間、テーブルに重なるように渦を巻いてきらめく宇宙が見えた。

カミーユは驚いた。なんだこれは。疲れているんだらうか。

『ガンダムマーク2をぶんどる』頭の中に言葉がはしつた！

カミーユとファアの近くには他の客はいない。

店内の反対側、声などどうてい聞こえない距離に中学生グループがいた。

しかし確実に聞こえた。

「どうしたの？ カミーユ。知り合いの？」

中学生たちを見続けるカミーユにファアがたずねる。

グループ内の一人、黒髪で赤い服の少年と目が合う。

『カミーユって名前なのに、なんだ男か』

また言葉がはしった！

その言葉はカミーユの逆鱗にふれた！

新型モビルスーツ、ガンダムマーク2のパイロットに選ばれたのは、ハマーンカーン、カクリコンカクーラー、エマシーン、3人の中尉だった。

なぜ彼ら彼女らがパイロットに選ばれたかと言うと若手だから。

歴戦のエースパイロットはすでにリックディアスに乗っている。

ルナツーとソロモンではモビルスーツの開発体制は今までなかったのだ。

ジオンではモビルスーツの新型開発はサイド3本国とアバオアクーでのみ行なっていた。

新型が完成すれば生産自体はグラナダでもソロモンでもルナツーでも行なっていたが、新型開発を行っていないためノウハウがないのだ。

グラナダのキシリアは、月のアナハイムと組んで極秘でガンダムを開発したが、ソロモンのドズルやルナツーのガルマは、そんなことはしていない。

このためモビルスーツ開発においてルナツーとソロモンの、ジオン帝国は遅れをとっていた。

高望みはせずに、新型ガンダムと言ってもリックディアス程度のものでできればいいだろうと言う目論見なのだ。

その程度の目論見に歴戦のエースパイロットを当てるわけにはいかない。

ただしそれでも若手の中で将来の最優良株と認定されたのは嬉しいものだ。

ソロモンではナンバー1パイロットはランバルだと言われている。

それを超えることを目標にしているハマーンカーンにとっては絶

好のチャンスである。

カクリコンカクーラーは野心家タイプの男で、いずれは軍の幹部になりたいと思う。

よく恋人のアメリアには言っているものだ、『俺はこの宇宙で成り上がってみせる』

エマシーンは軍人の家系で任務として実直にこなすだけだ。

3人ともガンダムマーク2の性能には十分に満足している。

リックディアスに対して遜色のない機体性能がある、武装もビームライフル、バズーカ、2種類から選べる。

さらに機動性をアップするフライングアーマーや、G デイフェンサーと呼ばれる追加武装も計画されているみたいだ。

全くモビルスーツ開発体制のない中から半年でここまでのものを仕上げてきたのは技術屋のレベルの高さが伺われる。

「結構なんとかなるものだな」

カクリコンカクーラーが言う。

「なんとといっても今回のガンダム開発に参加したのはテムレイ大尉ですからね」

エマシーンが答える。

ガンダムマーク2開発のメインはフランクリンビダン大尉だが、監修として初代ガンダムを開発したテムレイも参加している。

酸素欠乏症にかかって長期間、技術者としてはブランクがあったのだが、さすがはもともと連邦軍トップのモビルスーツ開発者だけある。

「連邦の資金力もあるんだろうが、一年戦争のあの時期にガンダムを作った実力は伊達ではないということか」

「なんでもさらなるモビルスーツを作るつもりらしいわ」

「そいつはいい。できればその新型も俺が乗ってみたいものだな、いや乗ってみせる」

「そのためにはこの機体で、リックディアス以上の戦果をあげて見せないとな」

「戦争開始から半年経っているのに、ろくに戦闘がないとはね。」

民衆からしてみたら戦闘がないのはいいかもしれないが、軍人としてはちよつとな」

「ジュピトリス絡みで、どうなるかっていうところかしら」

「ハーマン中尉はソロモンからだったよな。何か聞いてないか」

アバオアクー方面に向かっていているジュピトリスには、ジオン帝国陣営から一番近いのはソロモンになる。

「ドズル閣下みずから出るようですよ」

「まじかよ。でもアバオアクーからのニュータイプ部隊に遭遇したらヤバイぜ」

「グラナダのことを考えたらニュータイプ全員は出てこれないでしょう」

「キュベレイ1機でもままずいぞ」

「そうですか？ 1機ぐらいならなんとかかなりますよ」

あまりのハマーンの自信にカクリコンは驚いた。

しかしハマーンならガンダムマーク2でキュベレイを倒せるかも。

シミュレーションではカクリコンとエマは、年下のハマーンに負けっぱなしだった。

ハマーンの父親マハラジャカーンはジオンダイクン時代からの有力者。

ジオンダイクン亡き後は、デギンの側近中の側近。

長女マレーネはドズルの側室。次女がハマーンカーン。

一般家庭に生まれたカクリコンにはハマーンのような存在は、憎悪の対象でしかない。

でも表向きに敵意を表したりはしない。そんなことしても損するだけだ。

『利用できるなら利用する。そしてチャンスがあれば蹴落としてやる』

第16話

ジュピトリスに真っ先に近づいたのはグレミートトの部隊だった。グワジン級1隻。

キュベレイ3機。リックディアス10機。

「ここで反転して待機。ソロモンやグラナダの部隊が追いつくのを待って、攻撃をしかける」

「グレミー総帥。ジュピトリスに接触するのは後でよろしいのでしょうか」

グレミートトが総帥になった後に、副官となったオウギユストギダシがきく。

「後でよい。こちらの強さを見せつけければ、ジュピトリスも喜んで従うようになるだろう」

「そうですね。しかし、ソロモンとグラナダの部隊に挟撃されたら最悪・・・」

「最悪を想定するのは良いことだが、それでも我々の勝ちさ」

「グラナダからはニュータイプもありえます」

「それでも勝つ」

自信満々のグレミートトにたいして、オウギユストギダシは少々心配になってきた。

キュベレイの強さは知っているが、グワジン1隻は少なすぎるのでは？

せめてグワジン2隻の戦力は必要だったのでは。

ギレンザビの息子だというが、去年まで17歳のグレミートトなど大部分の人間は存在すらしらなかったのだ。

トト家、マツナガ家、サハリン家などジオンでは名門とされる家系は知られている。

しかし家の名前を知ってるだけである。

パイロットとしてしられたシンマツナガや、少将としてしられたギニアスサハリンと違って、グレミートトの実績は皆無だった。

後々、極秘のニュータイプ部隊を任されていたと、メディアを通じ

て広く宣伝された。

『いくぶん功をあげているのだろうか』

グワジン1隻でソロモンとグラナダの部隊を制し、ジュピトリスを味方につける。

そうすればアバオアクー全ての将兵がグレミートトを認めるだろう。

結局、軍人は戦いで自らの能力を証明するしかないのだ。

ガルマザビも武功をたてるまでは、親の七光りなどといわれていたものだ。

約30分後、ソロモン方面からのグワジン級3隻、グラナダ方面からのグワジン級1隻、接近との報告がはいった。

『まいったな。グワジン4隻か』

オウギユストギダンは苦い顔をしたが、グレミートトは喜びの笑顔だった。

グレミーと接触する15分前、ドズルとマクベはレーザー回線を通じた。

「キャスバル総帥からジオン帝国軍とは戦うなどと言われております」

「こちらでもデギン陛下からネオジオンとは戦うなど言われておる。こちらはニュータイプと戦う策はあるのか」

「いえ、ありません。こちらは無理にジュピトリスに接触する気はないのです」

「アムロレイも連れてこないとは。赤い彗星のやつめ、何か企んでおるな。だが、まあいい。同盟がどうなるかはわからんが、今回は共闘と行こう」

「キュベレイに勝つ自信があるのですか？ 最低でも一機は絶対に出てきますよ」

「ランバルが、やるそうだ」

ドズルザビは作戦を説明した。

マクベは北宋の壺を眺めながら聞いていたが、聞き終わると、

「それは面白い。やってみましょう。それから戦闘が終わった後は、ジュピトリスとの交渉はお互いに行うということでしょうか？」

「かまわん。互いに条件を伝えて、ジュピトリスの方で選んでもらえばいいだろう。うらみつこなしでな」

グレミートトから見ると、前方から3隻のソロモンからのグワジンが近づいてくる。右側面からグラナダのグワジン1隻。

「私もモビルスーツで出ます」

オウギユストギダンの言葉を即座に認める。

「ラカンダカランとリックディアス隊を分割して指揮してくれ」

リックディアス隊の指揮は普段はラカンダカランであるが、二つに分けるなら自分が出るべきだとオウギユストギダンは思った。

「キュベレイ発進させろ！指揮はシャリアブルに任せる」

「フォウムラサメの調子が悪いようです。頭痛薬を飲ませてから出撃させます」

通信モニターから、フォウムラサメを担当するナミカーコーネルの甲高い声が聞こえてくる。

「かまわん。できるだけ急いでくれ」

『強化人間は強力だが不安定なのが欠点だな』

ニュータイプに匹敵するパイロットを生産できる強化人間だが、安定性に欠ける。

そのためシャリアブルは、ロザミアバダムやフォウムラサメ並みに徹底的に強化はしていない。

軽度の強化のためシャリアブルが一番安定していた。

「ロザミアバダムはどうか？」

「刷り込みが上手くいっているようです。問題ありません」

ロザミアバダム担当のローレンナカモトが誇らしげに言う。

アバオアクーのニュータイプ研究所はムラサメ研究所と言われ、ムラサメ博士が指揮をとっている。

ナミカーコーネルとローレンナカモトはムラサメ博士の後継の地位をめくつている。

そのことが良い方向に作用し、ムラサメ研究所の成果は格段に上がっている。

ロザミアバダムにはゲーツキャパを兄だと思い込ませる実験をしているのだ。

この実験をしてからロザミアは格段に安定性が増していた。

フォウムラサメにも、これをやりたいところだが記憶のない彼女には無理。

ドズルの艦隊は36機のリックディアスを出撃させた。これは全てのモビルスーツである。

真ん中に位置するドズルのグワジンからはロンメル隊。

左に位置するグワジンからはシーマガラハウ隊。

右に位置するグワジンからはランバラル隊。

モビルスーツだけでなく、岩石も排出していく。

ロンメル隊は艦隊の前面で護衛。

シーマガラハウ隊とランバラル隊は、二手に分かれて岩石とともに敵のグワジンに近づいていく。

「岩石をまいての戦いか。考えたものだ。たぶんダミーも混ぜてあるぞ。リックディアスは問題ないが、キュベレイのファンネルは？」ラカンが喋る。

「大丈夫だ。普段よりは操作しづらくなるが、それはどのモビルスーツも同じであろう」シャリアブル。

「艦隊は近づいて来ないな。3隻の数の利をいかしてくると思ったが」オウギユストギダン。

「モビルスーツで決着をつけるといふことか。だがやはり、グラナダからのグワジンが気になるな。あちらは岩石を撒き散らしてこないから、私一人で仕掛けてみる。ただし、アムロレイの部隊が出てきた

ら、一人では厳しい」シャリアブル。

「リックディアスを三つに分けよう。ラカン少佐が3機とフオウムラサメで右からの敵に当たってくれ。私と3機、ロザミアバダムで左からの敵に当たる。シャリアブル少佐はグラナダからのグワジンを頼む。残りリックディアス4機は、ここで待機。グラナダからのグワジンの出方しだいで臨機応変に対応する」

階級が一番上のオウギユストギダン大佐が結論をだす。

「グレミー総帥もよろしいでしょうか？」

「任せる。待機してるリックディアスには、こちらから指示を出す。後方からのほうが全体を見渡せるからな」

キュベレイが1機、近づいてくるのを見てマクベはモビルスーツ隊を発進させた。

12機のリックディアス。

「敵を倒す必要はない。時間稼ぎをすればいいだけだ。全てはランバルに任せろ」

12機のリックディアスから何のプレッシャーも感じないシャリアブルはグレミーに通信を送った。

「敵にニュータイプはいません。待機させてるリックディアスは岩石地帯に送ってください」

「大丈夫か？ あの黒いリックディアスは三連星ではないのか」

「大丈夫です。遮蔽物のない空間では少数の味方は邪魔なだけです。数が違いすぎるため防戦になります。問題ありません」

「分かった。岩石地帯を攻略したら、すぐに援軍を送る」

ラカンダカラン隊はシーマガラハウ隊に対して、優勢に戦いを進めていた。

「岩石地帯を作っておきながら、こうも消極的に戦うとは、本命はやはりグラナダからのほうか」

こちらを倒す気がなく、岩石に隠れて時間稼ぎばかりをしてくる敵

に苛立っていた。

逃げ回り、隠れ回る敵を撃破するのは、岩石地帯では困難なのだ。フォウムラサメのキュベレイもファンネルを有効活用できていない。

「大丈夫か、フォウムラサメ中尉」

「岩石が邪魔で」

「焦ることはない。こちらが優勢なのは間違いないのだから」

もしもニュータイプがグラナダから来ているなら、一刻でも早くシャリアブルの援護に行きたいのだが、だからといってここでフォウムラサメを焦らせてもしょうがない。

ラカンみずから、ようやく1機撃破したところで、待機させていたりツクディアス2機がやってきた。

「マシユマーセロです。グラナダからのモビルスーツは黒い三連星を含む12機のリックディアスでした。シャリアブル少佐は1機で抑えるそうです。残り2機はオウギユストギダン大佐のほうにいきました。岩石地帯のモビルスーツを殲滅したら、深追いせずにシャリアブル少佐の援護に行けとグレミー総帥がおっしゃってました」

「うむ。わかった」

『グラナダからが本命ではない？　そしてここも本命ではない。ならばオウギユストギダンのほうが本命か！　しかしどうやってキュベレイを倒す』

疑問を感じながらも全力でシーマガラハウ隊を攻撃するラカンダカランであった。

ランバル隊のグワジンでは、青いリックディアスを含むリックディアス全機が出撃した後。

岩石を撒き散らし。その後に、

「ハモン、いつてくる」

「戦果を期待しています」

「ハハハハハ、焦るなよハモン。ヴァルヴァア口発進する！」

自身の愛機である青いカラーリングのリックディアスではなく、モビルアーマーでランバルは出撃した。

散らばる岩石に紛れていたためグレミー側は、これを見落とした。

ズムシテイーの戦いで猛威を振るったニュータイプ専用機キュベレイ。

ろくに新型モビルスーツ開発ラインを持たないソロモン陣営。数で押すしかない。

それぐらいいか思いつかなかったものが大半であったが、ランバルは自信を持って倒せると断言した。

一年戦争が終わった後、ギレン総帥の命令でニュータイプ専用機とモビルアーマーの開発は終了となった。

もちろんそれは建前で、裏で極秘に開発を続けキュベレイやノイエジールを完成させたのだが、表向きは開発は凍結となっている。

表向きに一番最後に作られたモビルアーマーはビッグロの進化系であるヴァルヴァアロ。

そのヴァルヴァアロを改良したヴァルヴァアロ改をランバル少佐は求めた。

「本当にそれだけでいいのか？」

「大丈夫です、ドズル閣下」

「それだけで、キュベレイに勝てるのか」

「ゲリラ屋にはゲリラ屋の戦い方があります」

ジュピトリスとの交渉には当然グレミー陣営もネオジオンも出てくる。

戦闘の可能性もある。

重要なことのためソロモンからドズル自らで。

護衛はソロモン最強部隊ランバル隊を含むグワジン3隻。

ドズルザビ自ら出撃することを、マハラジャカーンなどは止めた。

しかしランバラルを信じてドズルは出陣。

『地球連邦の戦いの時だって、最初は誰もが勝てるわけないと思ったものだ』

正攻法では勝ち目がないかもしれないが、奇襲なら十分に勝利は可能だと思った。

「青いリックディアス！ ランバラルの部隊か」

岩石地帯でランバラル隊と交戦したオウギユストギダンには手強いと思った。

連携がよくとれていて、個々の力ではなくチームとしての強さでは負けていると思った。もちろん数でも負けている。

『キュベレイのファンネルが有効に使えば、こちらが全然有利なのだがな。ならば指揮官を狙うか』

青いリックディアスを追いかけるオウギユストギダンだったが、キュベレイの方で照明弾が上がるの確認した。

リックディアスの指の根元にはトリモチ、照明弾、信号弾、消火剤などがしこまれている。それを敵が打ち込んだみたいだ。

離れた距離から照明弾を見ていたオウギユストギダンは、キュベレイに突っ込んでいく赤いモビルアーマーを発見した。

「何だアレは？ ビグロ？ いやヴァルヴァアロ」

一年戦争において実践投入されなかったヴァルヴァアロは知られていなかった。

ヴァルヴァアロに気付いただけでも大したものだ。

間に合うわけではない、と解っていたがオウギユストギダンは全速力でキュベレイに向かった。

旧式のモビルアーマーに何ができるのだと思ったが、嫌な予感が湧き上がってくる。

「ランバラルほどの男が意味もなく旧式を使うはずがない。勝算があるのだ」

ロザミアバダムと、そばのゲーツキャパには余裕があった。

「ロザミィー。突っ込んでくる馬鹿がいるぞ」

「わかってる、お兄ちゃん」

『どいつもこいつも、ちまちま隠れて！』

岩石地帯を有効利用して積極的に仕掛けてこない、敵リックディアスにロザミアバダムは苛立っていた。

そんなところに正面から仕掛けてこられたわけだから、願ったり叶ったり。

「いけえーファンネル！」

10基の全ファンネルをモビルアーマーに向ける。

キュベレイのファンネルに対して、ランバルルのヴァルヴァアロは乱射で応戦。

メガ粒子砲。ビームガン2門。

2連装ミサイルランチャー2基。110mmガトリングガン4門。

これらを惜しげもなく、まきちらす。

ガトリングガンなど弾数は多くても威力は小さい。

しかし、小型のファンネルを落とすには十分だ。

キュベレイのファンネルが7基、破壊された。

『これが目的か！確かにモビルアーマーには豊富な武装がある。それでファンネルを破壊してしまえば、キュベレイなど、ちよつとばかり高性能な機体にすぎない』

オウギユストギダンは心のなかで叫んだ。

さらに驚いたことに、キュベレイのファンネルから放たれたビームはヴァルヴァアロにはじかれた。

『ビームコーティングだと！完璧なビームコーティングなどありえん。小型のファンネルのビームだから弾かれるのだ。その証拠にゲーツキャパのビームライフルは避けている。恐るべしランバルル』

「ファンネルがきかんとは！ならばビームサーベル」

ゲーツキャパはビームサーベル抜きはなち、ヴァルヴァアロに向かおうとするが、敵の青いリックディアスに阻まれ、鏝迫り合いとなる。

「ランバルル少佐！ いまです」

「でかしたぞアコース！」

ヴァルヴァアロ最大の射撃武装メガ粒子砲でしとめようとするが、ロザミアも負けてはいない。

ファンネルでメガ粒子砲の発射口を破壊。

「さすがだなニュータイプ！だがこれはどうだ」

ヴァルヴァアロから放たれる3つの杭みたいなものを、ロザミアバダムは気にもとめなかった。

それらはキュベレイにもファンネルにも向かってこない。

そんなものを相手にしてる暇はないのだ。

ヴァルヴァアロのビーム、ミサイル、ガトリングによつてファンネルは残り1基！

岩石地帯の戦いにおいて、大きな岩石の前に位置するのは常道である。

特にキュベレイはファンネルの操作もしなくてはならないため、背後からの攻撃を防ぐためにも有効なのだ。

しかし今回はそれが仇になった。

プラズマリーダー！

キュベレイの背後の岩石に突き刺さった3つの杭に囲まれた範囲内に高電磁波攻撃！

プラズマリーダーは杭を突き刺す場所がなければ使えない。

何もない宇宙空間では使えない武装なのだ。

岩石地帯を作り出したのは、目くらましや奇襲攻撃のためだけではなくてプラズマリーダーのためでもあったのだ。

キュベレイを助けようと、気を取られたゲーツキャパはアコースに撃破された。

「アツザムリーダーみたいなものなのか！」

各軍のエースパイロットが集められたオデッサの戦いでオウギユストギダンにはアツザムリーダーを目標した。

かなり離れた距離からだがビームライフルで杭の一つを破壊した。

しかしキュベレイは身動きひとつしない。

「遅かったか」

ロザミアバダムが死んだのか気絶しただけなのかはわからないが、どちらにせよ戦場では致命的と言える。

助けに行こうとするオウギユストギダンに敵リックディアスが2機せまる。

「どうやら敵は動けん。アコース、コズン。捕獲する。腕は切り取って構わん」

ビームサーベルでキュベレイの腕が切り落とされる。

「アコース。グワジンまで運べ。ドズル閣下には撤退を進言しろ。ヴァルヴァアの武装が半分はやられた」

アコースはファンネル1基も回収し、キュベレイを連れてさがつた。

連れ去られていくキュベレイをオウギユストギダンにはどうしようもなかった。

それどころか自分の命が危ない。

自分を含めてリックディアス2機で、ヴァルヴァアと9機のリックディアスを相手にしないといけないのだ。

岩石地帯を利用して徹底して逃げまくった。

しばらくすると、待機していた2機のリックディアスが援軍に来てくれたおかげで、なんとかグレミーの元まで撤退できた。

三陣営ともモビルスーツをグワジンに帰還させた。しかし修理や補給をいそぎ、次の戦闘に備えている。

腹が立ってしようがなかったグレミートトだが、怒りを表に出すのは自重した。

それをしては誰もついてこなくなる。

「さすがはランバルルというべきだな。ニュータイプ以外のエースパイロットにも高性能機を配備するべきだと、オウギュストギダンにも言われたが、まさに、その正しさが証明されたな」

「恐れ入ります」

「こちらはキュベレイ2機。リックディアス9機。敵はソロモンとグラナダ併せてリックディアス46機、モビルアーマー1機」

「互いにモビルスーツを2機ずつ失ったわけですが、こちらの1機がキュベレイですから、被害は大きいです」

シャリアブルが悔しげに言う。

「シャリアブル少佐は12機のリックディアスを相手にして、1機撃破したわけだが、どう感じた」

「あのまま戦闘を続けたなら5、6機は撃破できたはずです。しかし、その頃にはファンネルのエネルギーがなくなり、結局はこちらが撃破されると思います」

「そうか」

「こちらを撃破するつもりで攻撃してくれば、こちらも闘いやすいのですが、ひいて守られるとなかなか撃破できないものです」

「では、これからどうする?」

グレミートトは主な者にといかけた。

「攻撃すべきです。岩石地帯の外で戦うなり、岩石をグワジンで破壊してからなら勝利できるでしょう」

ラカンダカランが即答する。

「それは強引すぎます。ランバルル隊と闘いましたが、かなり手ごわかったです」

オウギュストギダンが慎重に答える。

「このまま待機してジュピトリスと合流するのも手です」シャリアブル。

「ジュピトリスは後どのくらいでつくのだ」

「30分ほどです」オペレーターが答える。

「モビルスーツの総力戦で負ける気はしませんが、こちらがグワジン1隻にたいして、敵は4隻。モビルスーツ戦は機体性能やパイロットの質で、少数でも勝ち目はありますが、艦隊戦は別です。艦隊戦になれば圧倒的に不利です」シャリアブル。

「たしかに。シャリアブル少佐の意見に賛成です。ジュピトリスを待ちましょう」オウギユストギダン。

「ジュピトリスが味方するとは限りません」ラカン。

「それは大丈夫。ジュピトリスのパプテマスシロッコは味方になります。たとえ味方にならなくても敵になることはありません。最低でも中立です」シャリア。

「なぜそんなことが分かる」

「同じ木星帰りの男として、興味があつたので調べました。相当な野心家です」

「野心家だとなぜ味方する。大将首が取れるチャンスではないのか」

「そんな低レベルな野心家とは違います。自分がトップに立ちたい男です。三つ巴の今の状況を変えたくないと思うはずです」

「興味深い話だな」グレミートト。

「もしグレミー総帥を倒せば、ジオン帝国やネオジオンで優遇されるでしょう。しかし一対一の戦いでは、すぐに戦争は終わります。さきの大戦では人類史上初の宇宙戦争でありながら1年間ほどで終了してしまいました。三つ巴の方が長期間戦争は続きます。歴史では2カ国の戦いより多国間の戦争のほうが長期化します。三國志や戦国時代などがそれです。そちらの方が野心家の男にとっては成り上がるチャンスなのです」

「そういう考え方もあるのか」

「幹部程度になりたいのであれば、グレミー総帥を狙ってくるでしょうが、自分の旗を上げたい男なら別です」

「よし解った。敵が仕掛けてこなければ、このままジュピトリスを待つ」

グレミートトは決断した。

ドズルの艦隊にマクベが合流して、こちらでも話し合いが行われた。

「敵のトップが戦艦一隻で目の前にいるんだから、狙わない手はないだろう」

シーマガラハウが高らかに言う。

「だが、ヴァルヴアロは試作機のため替えの部品はない。武装の半分を失っては、同じ手は二度とは通用しない。ヴァルヴアロの装甲にファンネルのビームが聞かないと知って、武装をピンポイントで狙ってきました。キュベレイのパイロット、恐るべき腕の持ち主でした」ランバラル。

「艦隊戦を仕掛ければいいじゃないの。4隻と1隻。モビルスーツ隊はさつきと同じように時間稼ぎ。実際に戦ってみてわかったけど、ランバラル少佐の言うようにキュベレイは厄介だよ。でも時間稼ぎならできる」

「確かに艦隊戦なら、ニュータイプなどは関係ない」

デザートロンメルもシーマガラハウに同意する。

「マクベ殿はどう思われますか？」ランバラル。

「策士で知られるマクベ殿。私も気になります」シーマ。

「こちらはグワジン1隻。自分の船だけではどうしようもないので、ドズル閣下にお任せします。ただし早めに決めないとジュピトリスが、この宙域にやってきます。位置的に先に接触するのはグレミーでしょう」

「でもこちらが有利になる可能性もあるのでは。グレミー包囲網が完成するかも」ロンメル。

「それは楽観的すぎます。交渉相手なので調べましたが、野心家のパプテマスシロッコは 戦争終結を早めるような真似は絶対にしません」

「それはどういふことだ」ドズル。

「グレミートト以外にギレンザビ陛下の血を引いているものはいるわ

けがないと思います。つまりグレミートトが死ねばアバオアクーは降伏するのか徹底抗戦するのか知りませんが崩壊です。この半年間なぜ膠着状態が続いたのですか？三つの陣営が入り混じっていたからです。もしも2カ国間の戦いなら、もっと早くしかけていたでしょう。一年戦争のように」

マクベにとっては絶対に当たると信じているよみである。

同じようなことをマクベとシャリアブルは語った。

シャリアブルはニュータイプの洞察力を持ってシロツコの本性を言い当てたが、マクベは自分自身が野心家だから分かるのだ。

「艦隊戦だ！グレミーの首を取る」

ドズルは決断した。

しかし戦闘が開始されることはなかった。

ジュピトリスから先行した、パプテマスシロッコの乗るメツサーラが到着したのだ。

第17話

パプテマスシロツコのメツサーラが近づいてきて、オープン回線でグレミートトに話しかける。

「こちらは味方です」

それを聞いてグレミートトはモバイルスーツにうたないように指示を出す。

もちろん標準はメツサーラに合わせてある。

シロツコはメツサーラを変形させてモバイルスーツにして接触回線でブリッジと話す。

「ギレン陛下の長子であるグレミー総帥こそが、正統なる後継者であると思っております」

「そうか、それはありがたい」グレミートト。

「いきなりで疑っておられる方も多いでしょうが、命令していただければ前面の敵艦隊を叩きます。その働きによって自分を証明したいと思います」

「ではジュピトリスが合流してから先陣を切ってもらおうか」

「喜んで」

だがここで、敵艦隊が撤退を開始した。

オープン回線からパプティマスシロツコがグレミーに味方したことを知ってマクベは即座に撤退を開始した。

「ジュピトリスが向こうについたのなら、こちらに勝ち目はありません。我々は撤退します。閣下のご武運をお祈りします」

それだけ言うと通信を切ってグワジンを回頭、グラナダに向かって発進した。

マクベはドズルの部下ではないため後のことは知ったことではない。
この状況なら、グレミートトはドズルザビを狙うはずである。余裕

の撤退であった。

「我が部隊が殿を務めます。ドズル閣下は早く撤退を」
ランバルルが即座に決断する。

「わかった、頼んだぞ」

ドズルはすぐに艦に回頭を指示する。

「私も残ります」ハモン。

「お前も撤退しろ」

「そんな！戦艦の援護もなしに無茶です。例えモバイルスーツ戦を生き残っても艦がなければ、どうしようもないでしょう」

「この船には捕獲したキュベレイとパイロットがいる。ソロモンまで届けてくれれば、後々捕虜交換も可能だ。今はそれほどの危機だ」

「わかりました」

ランバルルは自身の青いリックディアスで発進した。

ランバルル隊は岩石地帯で敵を迎え打とうとしたのだが、その前にモバイルアーマー形態のメツサーラが岩石地帯から飛び出してきた。

「なんて速さだ。ヴァルヴァロ以上だな。1機ぐらいかまわん。シーマとロンメルに任せろ。我々は岩石地帯で追撃してくるモバイルスーツを食い止める」

メツサーラはハエのようにドズルのグワジンにまとわりつく。

ロンメル隊とシーマ隊のリックディアスが振り払おうとするが、メツサーラには当たらない。

戦艦の武装の大半は前方に向けて設置されている。

後方からまとわりついてくるメツサーラに対してはモバイルスーツ隊が何とかするしかなかった。

「さてどうしたものかな」

シロツコの狙いはグワジンの後部スラストター。

ここに損傷を与えれば速度が低下して、後方のモバイルスーツ隊が追いつきやすくなる。

しかし約20機も敵のリックディアスがいるため、難易度は高すぎる。

「ドズル閣下は先に撤退してください」

ロンメルが告げる。今更グワジンが一隻いなくなっても戦力的には大した違いはない。

残ったモビルスーツもメツサーラさえ何とかすれば、残り2隻のグワジンに十分収容できる。

ドズルザビは全速力を指示した。

ドズルのグワジンがスラスター全開にしたのをみて、シロツコは腹をくくった。

グワジンの8基の熱核ロケットエンジンで最高速度になれば、メツサーラでは追撃は不可能だ。

その前にしとめる！

まずはグワジンの後部に向かって突っ込む。

護衛のモビルスーツがビームライフルの弾幕を張ってくるが、なんとかかわし、モビルスーツに変形する。

スラスター狙いだと思っていたリックディアス隊は意表を突かれる。

さらに変形するとは誰も想像していなかった。

1秒以下の高速変形のGにパイロットスーツなし。

それでもグワジンの右側を全速力で追い越しながら、メガ粒子砲×2、9連装ミサイルポッド×2、前腕2連装グレネードランチャー×2、を乱射する。

機関部をやられたドズルのグワジンが大爆発！

追い越した後はリックディアスのビームライフルだけではなく、2隻のグワジンから主砲連装メガ粒子砲×3、副砲連装メガ粒子砲×10、多数の155mm連装機関砲がせまってくる。

これさえも回避して、メツサーラは戦場を離脱した。

残り2隻の船に同じことをするつもりはなかった。

ドズルザビであればこそリスクを負ったのだ。

それに同じことが2度通用する相手とも思えなかった。

もう1度仕掛けたら、変形の間を突かれる恐れもあった。

残されたシーマガラハウとデザートロンメルは2隻のグワジンでソロモンに帰還した。

ドズル戦死を知った岩石地帯のランバラル隊は残り6機で降伏した。

ハイファン艦長、ライラミライラ、ケーラスウ、レズンシユナイダー、クリステイーナマツケンジー、マウアーファラオ、サラザビアロフ。

ジュピトリスの主な者たちがブリッジでパプテマスシロツコをまっていた。

シロツコが経過を説明した。

「新型戦艦ですか、それはいい」

ハイファン艦長が喜ぶ。

「できればグワジンを複数まかせて欲しかったが、まあいい。グワジンの進化系新型グワジンでは最大100機のモビルスーツが搭載可能だ」シロツコ。

「それは凄い。ジュピトリスのモビルスーツ全部いけますね」

「新型グワダン、シロツコごときには勿体無かったのでは」シャリア。

「複数の戦艦よりも1隻のほうが警戒しやすいからな」グレミートト。

「それはたしかに」シャリア。

「オウギユストギダンのいうように奴は優秀だが危険だ」グレミートト。

「グラナダとの決戦なら、ああいう者も使わねば」オウギユストギダン。

「そうだな。ニュータイプは多ければよい。できれば共倒れになってほしいものだ」グレミートト。

「やはり次はグラナダですか？」ラカン。

「ニュータイプ研究でも新型開発でも遅れてるジオン帝国よりも、フラナガン機関やアナハイムのネオジオンを先に攻めるべきだ」グレミートト。

「それは同意です。ドズルを失って動けないであろうソロモン。今こそグラナダを！ジオン帝国など時間を与えてもたいした事はできないでしょう」オウギユストギダン。

「わたしも同じです。ソロモンをとつてもルナ2がのこります。グラナダをとればネオジオンは滅びます。そしてジオン帝国との1対1になれば、おそくとも今年中には戦争は終わりますよ」シャリア。「よし、準備ができればいいグラナダに出陣だ」グレミートト。

「ランバル隊とロザミアの捕虜交換はどうします」シャリア。「ソロモン司令官は留守をまかされたマハラジャになるだろう。慎重派のマハラジャはアバオアクーに攻めるなぞせん。しかしランバルがソロモンに戻って、吊い合戦などと言つては、万が一にも・・・」オウギユストギダン。

「そうだな。捕虜交換はグラナダを落としてからにする。キュベレイと強化人間、ソロモンの奴らには使いこなせまい」グレミートト。

ルナツーとグラナダの月軌道上の中間地点で、キャスバルダイクンはデギンザビと食事をしていた。

デギンザビの旗艦グレートデギンの中にある、豪勢な小部屋でテーブルを囲むのは、デギンザビ、ガルマザビ、キャスバルダイクンの3人だった。

お互いの声は部屋の外までは聞こえない。

食事をしながら行われた雑談の中で気軽にキャスバルは切り出した。

「ジオンズムダイクン暗殺という話がありますが、実際にはどうだったのですか」

ネオジオンとジオン帝国の同盟。

表向きはこのためにキャスバルダイクン自ら皇帝デギンに会いに来た。

しかし実際には父親の暗殺。

これについて聞きたかったのだ。

これがそれが本来の目的である。

「シヤア、失礼だぞ」

「よい、ガルマ」

「できればデギン様ご自身の口からお聞きしたく、それであつてこそ納得できるといふものです」キャスバル。

「私はジオンズムダイクンの死には一切関わってはいない。暗殺などしていない。私が暗殺したなどというのは、ジンバルを始め敵対派閥の人間が流したでたらめに過ぎない」

「ギレン様は？」

「あの頃の私は現役であつた。もしギレンが暗殺に手を染めていたら気づかないはずはない。当時は若造だったギレンに、私に気付かれずに暗殺できたとは思えない」

「納得しました。育ててもらつておいてあんまり悪く言いたくはありませんが、養父ジンバルは思い込みが激しく偏狭なところのある人物でありましたから、納得です」

同盟は簡単に決まった。

互いに断る理由はないのだ。

アバオアクーに集中したいネオジオン。

時間を稼いで戦力増強したいジオン帝国。

終了後にキャスバルは自身のグワジンのブリッジからグレートデギンを眺めていた。

同盟締結の交渉には互いにグワジン一隻ずつ。

キャスバルダイクンは自分自身はニュータイプとしては大した力を持っていないというのは理解していた。

しかしニュータイプには共振作用みたいなものがあり、ララアスン

と公私にわたって過ごすうちに能力が拡大されていくのが分かった。もちろん拡大されたと言っても、アムロレイ、ララアスンには遠く及ばない。

だがデギンザビに直接会えば、父親ジオンズムダイクンを暗殺したのはデギンザビだということがよくわかった。

復讐をしている場合ではない。

地球圏をよりよく導くためには復讐などにとらわれている場合ではない。

『たった一度のエゴだ。これさえ終われば、後の人生は人類のために捧げよう。だから頼んだぞララアスン』

同盟締結が終わり、グレートデギンとキャスバルのグワジンは背を向けて帰還する。

互いに1キロほど離れた。

グワジンから探知できないほど離れた側面から放たれた大型メガ粒子砲が、グレートデギンのブリツジを吹き飛ばす。

『見事だ、ララア。よくやってくれた』

百式が超長距離からメガバズーカランチャーで狙撃したのだ。

復讐は達成されたが、高揚感などなく少々虚しさを感じた。

『ガルマ、君は良い友人だったが、君の父上がいけないのだよ』

サイド7から離れた位置のアーガマから、壊れたジムが射出された。

ジムは頭部、胸部、右腕しかない。

これにアムロレイとバーナードワイズマン、クスコアルがノーマルスーツでしがみついている。

サイド7の31バンチで、ブラック企業ジャンク屋のゲモンバジャックに拾われてコロニー内に潜入するのだ。

先に潜入しているレコアロンドたちと合流し、新型ガンダムに関するミッシェンに挑む。

「ガンダム強奪なんて可能なんでしょうか？俺、潜入なんて初めてで

「自信ないですよ」

バーナードワイズマンが『お肌のふれあい通信』

「心配するな。絶対に強奪というわけじゃない。強奪が無理なら技術者のみ連れてくればいいんだ。どうせ新型ガンダムといつてもたいした性能じゃないんだから。技術者だけで十分だろ」

「そうですか。クスコアル大尉は落ち着いてますね。やっぱニュータイプだからですか」

「落ち着いてるんじゃないかって、プレッシャー感じてるの」クスコアル。「なんでですか?」

「このコロニー、ニュータイプいるわよ。それも複数。アムロ少佐も感じるでしょ」

「ああ。いるな。あとニュータイプとは別で嫌な予感がする」

「まじですか。なんで、こんな難易度高いミッションに俺が選ばれるんだろ。俺、アムロ隊にむいてないですよ」

弱気になるバーナードワイズマンをアムロはなぐさめる。

「バーニイ、君が軍人らしくないからだ」

「それに、そこそ腕がたつ。あと1機撃墜でエースなんでしょ」クスココ。

アーガマ隊はアムロ隊とかニュータイプ部隊とかいわれているが、全員エースパイロットだ。

アポリーやロベルトをはじめとして、みんな顔つきや雰囲気は軍人みたいでコロニー潜入任務にはむいてない。

唯一の例外であったクスコアルはすぐに決定。

あと一人欲しいということ、外部からバーナードワイズマンの参加が決まったのだ。

「4機撃墜と言ってもルナ2でボール4機おとしただけです」

「嘘でしょ。あの圧勝だったルナ2でボール4機だけ?まさに典型的オールドタイプっていう感じね。私なんかあの戦いだけで13機落としたわよ。半分はジム」クスコアル。

「ニュータイプと比べないでください」

「まあいいじゃないか、バーニイも初陣で緊張してたんだろ」

「わたしも初陣でしたよ」

アムロのフォローを即座につぶすクスコアル。

全員エースパイロットのアムロ隊ではバーナードワイズマンのよ
うな男は貴重だった。

なんかホツとする。

アムロがいうのもなんだが、バーニイはまだ若いしこれからだ。

大事に育てようとアムロは思った。

サイド7ではティターンズのオペレーションZが、すでに始まって
いた。